

ペトリツツ　はい、併し乍ら八百四拾二號列車にはロベルト様が乗込んで居られました。

宰相　ペトリツツ！ペトリツツ！まさか……………どうだつた？どうだつたんだ？話して呉れ！

ペトリツツ　はい……………伯爵。

宰相　負傷したのか？傷はひどいか？

ペトリツツ　お逝れになりました。

（宰相、膝掛椅子に崩れ掛つて、前方を見つめる。ラ、と伯爵夫人が入つて来る。）

ペトリツツ　お、神様！

ラ、　パ、接吻させて頂戴。あの事、本當なんですの？彼の方は歸つていらつしやるの？まあ何

て嬉しいんでせう！貴君は大變がつかりしていらつしやる様ですわね、パ、？さう？又嫌な報

告でもあつたんですの？

伯爵夫人　カール、貴君ひどく苦しさうですわ。今晚は妾達と一緒に御休み遊ばせ。ロベルトの

話しをさせよう。ラ、が自分の詩を讀んできかせて呉れますわ。

宰相　うん……………俺は死ぬ程……………死ぬ程疲れた……………先にお行き。俺も行くから……………

（若い秘書登場。）

若い秘書　眞に申兼ねますが閣下、労働大臣殿が、ストライキ絶滅の必要手段は宰相家族の個人的災難の爲めに採用不可能となつた、と云ふ事を各地に打電し、又殿下の御耳に達して差支へ無いかどうかと尋ねて居ります。

宰相（彼の方に向き直り、彼を眺める。秘書朗讀する。）　労働大臣に電話をかけて、直ぐに書類に署名して、送り届けるからと告げて呉れ給へ。ラ、自分の部屋に御歸りなさい。俺は行く。俺は直ぐ行く。俺を一人にして置いて呉れ。労働大臣フレイに書類の署名をせにやならん。奴はさうでもしてやらなければあんなに目の廻る位早く出世出来る筈が無いのだ。是非とも、是非とも彼とよく了解し合はねばならぬ。あつちにお行き。

伯爵夫人　まあ、どうかしてるわねラ、？

ラ、　お父様は疲れ切つていらつしやるんだわ。

伯爵夫人　行きませう。聽えるかい、あの吠り聲が……妾達の國では、ハンガリーでは、あれは人魂がむせび泣いてゐるのだと云つてゐるよ。そして本當にさうだわ……だけど妾達は唯ロベルトの事を、彼が四日経てば歸つて来るのだと云ふ事を考へて居ませう。

（ラ、を抱いて出て行く。宰相獨り残る。暫くの間、彼は不動のまま坐つて居る。それから急に十字架の方に顔を向ける。）

宰相 若し俺が堪え切れなくなつたなら？本當に堪え切られる事では無いぢあないか？併し何の

爲めに？貴君は報ゐて下さるでせう。どんな報ゐるを？何も報ゐて下さる事は出来はしない……

あれ達に話をする？神様、神様、限りある力を御與へ下さつた貴君は、無限の悲しみを御送りなされるのですか……神様！それとも總てがさうでは無いのか……私は望を失つて仕舞ひま

した……私は盲も同然です……あれ達に話を、する。(椅子に腰かける。)書き置きをしやう。

何と書かう？「ロベルトが死んだ」。それだけ……俺は臆病者だ……急に眠りに

落ちる……死ぬ……(鈴をならす。若い秘書登場。)俺が出て行つた後で、これを奥様に渡して

呉れ……自動車の用意をする様に……俺は出掛けて来る……俺は街に出掛けて来る。

若い秘書 閣下、天氣が大變悪う御座います。(間。)閣下、御愁傷の至りで御座います。御屋敷中

深い悲しみに閉されて居ます。

宰相 もう知つて居るのか？ぢあ、あれ達も知つて仕舞つたかも知れない？自動車を早く……

俺は出て行く……大急ぎで。

(若い秘書退場。)

宰相 知つて居るのだ……(聴耳を立てる。)家の中はしんとして居る。そして風が吠えて居る。

まだ喜んで居るだらうか、それとも……それとも、もう？（出て行かうとして立止る。）逃げ出すんだ……お前から逃げ出すんだ。地上に悲しみの海原をつくつて居るお前から。笑ふな！行け、彼の子の處へ。行け、飲め、杯を飲め！やつて来る。誰かどやつて来る。これも神への人質なのだ。

（ラ、登場。）

ラ、御覽なさい、バ、……何かマ、に言つてはならない様な悪い事が起つたんぢありませんかんの？

宰相 その通りだ……お母様に隠して置かなければいけない……お前はあれに知れない様にして居るのだよ。お前はお母様を禦らなければいけません。ラ、。皆んなが知つて居る、だがお母様だけは知つてはならないのだ。

ラ、何の事ですの？

宰相 静かに。彼女は知つてはならないのだ。判るか？どんな事があつてもお母様に氣付かれない様にしてお呉れ。お前はお母様を禦らなければいけません、ラ、。皆んなが知つて居る。だがお母様だけは知つてはならないのだ。

ラ、何の事ですの？

宰相　汽車が轉覆した時に、ロベルトが死んで仕舞つたんだ。シツ！氣付かれない様に……………シ

ツ……………泣きたいのかい？扉をお閉め、扉をお閉め、ラ……………（歩いて行つて、扉を閉る。）泣き度いのかい？泣けるならお泣き……………御覽、俺は泣く事さへ出来ない。

（ララ泣く。）

うん、さうだ。お前が悪いんぢあない……………ロベルトが悪いんぢあない。ユーリヤが悪いのも無い……………レオが悪いのも無い……………ノルドランドが悪いのも無い。

（扉をノックする音。）

誰だ？若しお母様だつたら隠して居るんだよ、ラ。隠して居るのだよ。誰だ？

若い秘書　労働大臣殿が書類を要求して居られます。

宰相　俺は署名するよ。

— 幕 —

第六場

三ヶ月後、ケツペンの邸宅。春。窓が開け放たれ、その向ふにライラックが咲いてゐる。輝かしい陽光。奇麗に裝飾されたテイー・テーブル、時間はまだ早い。平常着を着たクレールヘンが可成りバラバラな頭髪をリボンで止めて、テーブルの邊を急がしさうに往來して居る。フリッツがとても穢れたポロ／＼の洋装をして、微笑し乍ら、彼女を見て居る。

フリッツ　あの人が目を見まさない中に私を何處かにそつと出して仕舞つた方が良いと思ひますよ。

クレールヘン　だけど大した事ぢありませんわ、そんなこと……妾は決して貴君を其の時迄お止めしはしません……そんな事は大した事ぢありませんわ。貴君は、妾の夫が貴君を賣るだらうなんて考へていらつしやるの？

フリッツ　そんな事は考へては居ません。併し貴君の具那さんは貴君の應待ぶりと僕の圖々しさを腹を立てるでせう。

クレールヘン　圖々しさをすつて？反對ですわ、貴君がそんな事を心配して下さるのは却て可愛らしい位だわ……

フリッツツ　僕はつけられて居たんです。やつと胡散臭い奴を巻いて仕舞ひましたから………此處に尻尾を引づつて來た様な事は決してありません。だが、奴の家に行かうとすると、亦犬共を怒らす事になりますよ。奴等は屹度、張つて居ますからね。

クレールヘン（彼の前にお茶を置き、クリームと砂糖を入れ、パンにバターをつける）　貴君の一生を考へるとぞつとしますわ。

フリッツツ　何でも有りませんよ！僕は此の三ヶ月の間、随分色々な事をやり遂げました。××の波はどん／＼大きくなります。クレールヘン、我々は最早××の前夜に居るんです。併し、貴女がこの事を喜んで呉れるかどうかは知りません、貴女の夫は資本家ですからね。

クレールヘン　妾は今迄通り——社會主義者です。

フリッツツ　ハ、ハ、ハ。いや、結構、總ての事は目論見通りだ。クレールヘン、總ての事は目論見通りです。實に楽しい朝飯だ。で、もう一度眞面目に願ひしますが、アンナに急ぐやうに云つて下さい。それから僕に着物を着換へさせて下さい。

クレールヘン　アンナの處に電話が無いつてことは貴君も知つて居るぢありませんか。妾は姉さんの處に使ひの子供をやりました。それから着換へは今直ぐにでもいゝですわ。

フリツツ　それは有難い。何處に着換に行つたら好いんですか？

クレールヘン(ベルを鳴らす。召使ひ登場)　マルー、このお方を角の郎屋に御案内して、それから

具那様の鼠色の三つ揃ひを差上げてお呉れ、——知つて居るだらう、且那様が去年の春、着て
いらした鼠色の……？

召使ひ　かしてまりました。……存じて居ります。(召使、非常に驚いて、一寸キョトンとする。フリ

ツツと一緒に出て行く。)

クレールヘン(茶を飲んで、頭を振る)　アンナはどんなに喜ぶだらう。彼の人は銃殺されて仕舞つ

たと許り思ひ込んで居たんだもの。(間。それはさうとアドルフが長い間目を覺さないで呉れ
ばいゝが。

(從僕登場。)

從僕　伯爵夫人、ラ、・フォン・トウラウ様のお越しで御座います。

クレールヘン　何だつて？こんな朝つぱらから？

從僕　お通し致しませうか？伯爵夫人は、且那様を訪ねてお出になつたんで御座いますが。

クレールヘン　日那様は未だ休んでいらしゃいます。伯爵夫人さへお差支へなければ、妾が御相

手します。

(從僕退場。)

クレールヘン　どうしたんだらうこんなに早くから？まだやつと九時になつた許りなのに。

(ラ、喪服を着て登場。)

ラ、　失禮を御許し下さいまし。

クレールヘン　伯爵夫人、妾共は何時でも喜んで御迎へ致しますわ。何卒ぞお掛け下さいませ……

お茶は如何で御座いますか？

ラ、　いゝえ……… merci………、ケツペンさんにお會ひし度う御座いますの。ほんの一寸の間。

クレールヘン　アドルフは起るのが遅う御座いますの………けれど、唯今、起す様に申し付けませう。(ベルを鳴らす。)

ラ、　本當に何と申譯け申してよろしいやら………けれど、外の時間に外出する事は難しう御座いますの。妾は何時も不幸なお母様に付き切りで御座いますので。

クレールヘン　お母様の御氣嫌は？

ラ、　大變良く御座いません。時々謊言を申して居ります………母と一緒に居るのは大變つらう

御座います。お醫者はもう長くは無いと云つて居ります。

クレールヘン 本當にお宅は御不幸つゞきで御座いますわね。でもお父様だけは御丈夫でございませう？

ラ、 多分。

(從僕登場。)

クレールヘン 旦那様を御起ししてお呉れ。伯爵夫人ラ、・フォン・トウラウ様が今直ぐお會ひし度いと仰言つてお出でだと申上げてお呉れ。

(從僕退場。)

ラ、 本當に、何だか申譯け御座いませんわ。

クレールヘン いゝえ。主人は昨日、割合に早く寢ましたの、二時か三時頃でございましたわ……何時も永い間寢て居りまして……………

(フリッツ、鼠色の三つ揃ひを着て登場。)

クレールヘン 御紹介致しますあの……………

(彼を眺める。)

フリッツ　　リヒアルト・ワインシユトツクです。マダム・クレールヘンの親類に當るもので……
行商を致して居ります。

（ララ素氣無く頭を下げる。）

フリッツ　　御話しの御邪魔を致しましたかしら？失禮さして戴きます？クレールヘン、アンナの
來るのを待つてるだけです。

クレールヘン　　ねえ、フリッツ……いや、リヒアルト、隅の部屋で何か本でも讀んで居て頂戴、
彼處に本棚があるから。

フリッツ　　それは何より結構です。（出て行く。）

クレールヘン　　妾の親類の……行商人でございますの……え……とても規帳面な男です
の……お茶を差上げませうか？

ラ、　　結構でございます、ケツペン夫人。

クレールヘン　　貴君は何時も御悲しさうでいらつしやいますね。

ラ、　　妾が楽しさうだつたらそれこそ不思議ですわ。妾の悲しみは山程ありますが、一人の友達と
てございませぬ。妾は唯、貴女の旦那様に望みを御懸けして居るだけです。彼の方はロベルトと

もレオとも、仲良くして下さいました……妾はよくあの方と（ハンケチで兩眼を拭ふ）色々な氣高い、深遠なお話を致しましたわ……

クレールヘン 主人は貴君の御爲めなら何でも致すでございませう。

（ケツペン登場。むつつりと、氣嫌が悪い。）

ケツペン 何が何だかさつぱり判りやしない。御免下さい、ラ、伯爵夫人、本當に御免下さい……

……一寸の間失禮さして戴きます。クレールヘンが私を起しましたのです。勿論、伯爵夫人がこんなにお早くお話しにお出でになつた以上、それは結構なのですが。私が目を覺まして見ますとこの天氣でせう、鼠色の春着を持つて來る様に云ひ付けると、「もう、外のお方が御召しになりました」と云ふぢありませんか。——「外のお方とは誰だ？」——「奥様の處にお越しになつた、毛皮の外套を着た、大變汚らしいお方でございます。で、そのお方に旦那様の鼠色のおめしを差上げる様にとの御云ひ付でございます。」畜生、何て云ふ事だ？御免下さい、ラ、此んな事は決して毎日ある筋合ひのものではございません。いや、クレールヘン、何も云はないでくれ。何に？我々は上衣一つで家庭争議もおつ初め様とても云ふのか？お茶をついで呉れ。それから夫人にも。

クレールヘン　奥様は召上りませんの。

ケツペン　私と一緒になら、飲んで下さるだらう。(クレールヘン茶をつぐ。) 夫人、お話を承りませう。

ラ、　たつた二人きりでお話し致し度いのでございますが。

ケツペン　結構です。クレールヘン、俺のズボンの入用な、そのお方の御對手をしに行くがよい。

(クレールヘン、どきまぎして出て行く。)

何が何だか判けが判りません。此處では、屢々こんな現象が起るのだらう等とは何卒ぞ御考へならない様に、ラ、クレールヘンは貴君のこの御美しさの前では、愚鈍で、教養がありません、だがあれは大變正直な女です、あゝ、懐かしいララ、貴君にこそ、晩そ咲きの青春、此上もなく永い間保たれた新鮮な情があります。齡ひ三十五にして、美しさに惑はされて女店員と結婚する。そして今では妻の替りに姉の召使ひ女。いや、この抒情詩的な熱情を御許し下さい、心から、御話しを承りませう。だが、その前に皆様の御氣嫌は如何でございますか？

ララ　アドルフ。聽いて下さい……妾には、妾が一度も忘れた事の無い可愛いレオの死、それ

から神様も同様なロベルトの死を堪え忍ぶ事が出来ません。妾の掌の中に残つたものは氣狂ひのお母様だけです……陰鬱な私達の家……妾はこの通り一人ぼつちです……一日中、一日中お母様と一緒に居るのです。お母様はカルタを目茶苦茶に並べては、あの人達の事ばかり口走つて居ます……不思議な言葉で。妾の日中は虚です、妾の夜は悪夢です。妾の心中も空虚と悪夢で満されて居ます。アドルフ、どうして妾は生き永へて居られませう？何が妾を支へる事が出来ませう？總ての私の希望は向ふ岸にあるのです……アドルフ、貴君は私達のお友達です、貴君は男らしい方です、貴君には悲劇的な、英雄的な經驗と云ふ事が御判りになるでせう……妾は死ななければなりません、アドルフ。

ケツペン　　ララ……

ララ　　妾は死ななければなりません。妾が泣いて居るのが御判りでせう。妾は死ななければなりません。外の世界で目覚める爲めに眠りに付く様な懐かしい毒藥が欲しいのです。誰がそれを呉れるでせう？皆んなには判りはしない……皆んなは、死を何か運命的なもの様に考へてゐます、自殺を罪惡の様に考へて居るのです。妾を牢獄につないで置く事が、妾を愛して居る事であり、妾に善を爲す事であると思つてゐるのです。だけど貴君は判つて下さいますわ、ケ

ツペン、貴君は伶俐な——偉大な方ですもの。

ケツペン　　ララ、私にはよく貴女が判ります。だが貴女は未だお若い。灰色の日、秋がやつて來ました。——信じて下さい、——冬來りなば春遠からじです、貴女は戀をなさるでせう、喜びがやつて來るでせう。

ララ　　何故ですの？彼の世では、彼の世では……

ケツペン　　彼の世でどうなるかは誰にも解つて居ません。だが此の世では——貴女は魁惑的な、

詩的な美人です。死ぬ事等考へるのはお止しなさい。

ララ　　貴君は妾の愁の奥底を知ては居らつしやらないのです。

ケツペン　　お待ちなさい、ララ。お望みならば、私が貴女の生活を御援けしませう。この私が……

ララ　　どう云ふ風にして援け様となさいますの？

ケツペン　　こうしたらどうです……こうしたらどうです……ララ。ロベルトの記念出版をし

ませう、どうお考へですか？傳記は誰か仲間の文學者が書く。貴女と私の想出の記。ロベルトの詩、書簡、日記。彼に捧げられた論文、詩、スケッチ。立派な本です……堂々たるテーマです、どうです。ララ？表題は「伯爵ロベルト・デルンバッツハ・フォン・トウラウ」……

ララ 勿論、そりや素敵ですわ………だけど妾は生活に疲れて仕舞ひました。

ケツベン 何を云ふんです。お母様に付いての並々ならぬ心配から自由になればよいのです。私がいゝ具合にしますから。

ララ 貴君は善良な立派な方だわ………でも本の名は「デイオスクーリ」とした方が良いと思ひになりませんか？

ケツベン あゝ………さうですか………ロベルリとレオに捧げるんですね？

(ラ、うなづく、彼女は少し元気になる。)

ララ デイオスクーリ。英雄達の墓の上に置く花の冠りです。

ケツベン そしてこゝろ署名するのですな。「ララとその友」。

ララ そのためなら、妾、一生懸命になれると思ひますわ。

ケツベン 私の呪ふ可き商賣は私に僅かの時間しか残して呉れませんが、自由な時間は總て——
貴女に捧げませう。

ララ あの人達にです、アドルフ、——そうすれば、あの人達は微笑んでくれるでせう。

ケツベン そして貴女も。貴女のチャーミングな微笑は、その事一事であの人達を幸福にするで

せう。

ララ その微笑は神を嘲笑するものかも知れませんが。寡婦はそんな事をしてはなりません。

ケツペン 末亡人は幸福であらねばなりません。貴女の幸福は——あの人達に取つては喜びです、

ララ 貴女、さうお思ひになつて？

ケツペン さう感じます。

ララ けれども、妾の幸福は、あの人達の中にあるのです。

ケツペン 此の詩的な悲しみに満された眼を見る時、此の感動的なしなやかな唇を見る時、クレ

ールヘンなどは何と影がうすく成る事だらう。

ララ そんなこと、仰言らないで頂戴。

ケツペン 私は貴女に純潔な愛を捧げます……若し貴女が許して下さるならば。私の接吻も

亦、清らかなものです。

ララ ケツペン……死人は嫉妬深いものです。妾の心の中に巢喰つて居るあの人達の想出は、

生きた戀愛の影さへ與へて呉れません。

ケツペン（彼女の額を接吻する。） いゝえ、いゝえ……あの人達は貴女と貴女を愛してゐる人を

祝福して呉れます……ララ、私は貴女の生活を御援けしませう。

ララ アドルフ、アドルフ、妾は死の國に急いだ方が好いわ、

ケツペン ララ、貴女は未だ愛の島へ遊びに行く事もありますよ。

ララ 貴女は地上でこの上もう少し生き永らへなければならぬとお考へですの？さうお考へで

すの？

ケツペン さうです……ララ……さうです……私達是一緒にその時を過ぎしませう。

ララ 本………

ケツペン(彼女に接吻する。) 本………本………

ララ 「デイオスクーリ」

ケツペン(彼女に接吻する。) 何と云ふ恍惚が貴女から流れ出る事でせう。

ララ(静かに) ケツペン………妾の身體を貴君に上げますわ………まだ家に残つてゐるものは皆

上げますわ。だけど清らかにしてゐて下さい。妾はデイオスクーリの寺院の尼僧だと云ふ事を

覚えてゐて頂戴。

ケツペン 覚えてゐますとも、私の魂を奪ふ様な、可愛らしい、詩の様なララ………

(彼女に接吻する。)

ララ 妾、こんな事にならうなど、は夢にも思ひませんでしたわ。妾は死なうとしてゐたのですもの。

ケツペン さうして戀を獲たのです。

ララ 謊言を云ふ年老つたお母様の處に歸つて行くなんて本當に悲しいわ。

ケツペン お、私は貴女をこの恐ろしさの中から解放してあげませう。

ララ 貴君は妾の騎士に、そしてあの人達は妾の天使になるのです。

ケツペン さうです、さうです……

ララ 左様なら……

ケツペン 近い中にお會ひませう。

ララ 妾電話で御約束しますわ。

ケツペン 御送りませう。

ララ よろしいんですの……其の儘にどうぞ……(鏡に近付いて、身なりをなおす。眼が妙に

光つて居ますわ、それから顔が赤くなつたわ。これは善くない事です、妾には罪惡がこめか

みの圍りを搏つて居るのが判ります……………

ケツペン キツスして……………

ララ いゝえ……………いけません……………近い中に會ひませう。どうやら、妾落着いた様ですね。世間の人に見られない様にしなければ……………

ケツペン 勿論ですとも……………世間の人には醜惡なものです……………

ララ 御送りならないで頂戴……………(彼女は喪のヴェールを額にかける。)左様なら、アドルフ!

ケツペン 左様なら、ララ。

(ラ、退場。)

ケツペン センチメンタルな馬鹿女だ。(椅子に腰かけて、コーヒーに砂糖を入れる。)全く、輕はづ

みな女だ……………ハ、ハ、ハ！お互にまあ無駄噺をしたものさ。アハ、女の悲しみか……………

ハ、ハ、ハ！「彼女その靴さへも履き切らざる中に……………」か、シエクスピーアはちやんと

知つて居たよ……………ハ、ハ、ハ！……………(間。)レデイ。アンナか……………可愛いな……………可愛い

い足……………可愛い手……………さうだ、ケツペン、お前は偶然にも素晴らしい戀人をつくつたも

のだ

(從僕登場。)

從僕　アンナ・クラインバウエルとか仰言る方が……奥様の御親類らしう御座います。

ケツペン(急に振り向けて)　アンナ……お呼びしてくれ。(從僕出て行く。)あ、畜生、實際あれは

金髪の妖精で、工場のワルキリアだ、マフトシユタツトのカルメンだ、ケツペン、好いかも
だ。若しアンナがうまくものになつたら、ララを十度、十字架に打ちつけてやつてもいゝわ
い。

(アンナ登場。)

アンナ　今日は、クレールヘンは何處ですか？

ケツペン　知りません……何御用でいらつしやいますか？

アンナ　妾は貴君の處に參つたのではありません、ケツペンさん。

ケツペン　それは私も存じて居ります。美しのプロレタリアよ、クレールヘンが来る迄、一寸の

間お腰をお掛け下さいませんか。失禮ですがお茶を何卒ぞ。

アンナ(坐り乍ら)　若い男の人が居りませんでしたかしら？

ケツペン　私も男で——それに、まだ餘り年でもありませんよ。

アンナ 冗談は止めて下さい……………私は大變興奮して居るんです。

ケツペン 私も。

アンナ 妾の……………妾の近しいある男が死んだのです……………妾はその人が死んだのだとばかり思つて居ました……………だけれどあの人がこゝに居るかも知れないんです。

ケツペン ふむ……………私はその男が生きて居ると思ひますよ。私は、一年前に着て居た灰色の上

衣をその男が着用して居ると云ふ事をお知らせする根據を有してゐます。

アンナ 下らない事は云はないで下さい。あの人が何處に居るのか話して下さい。

ケツペン 此處には居ません。クレールヘンと一緒に何處かに行きましたよ、

アンナ そんなら妾も行きませう……………

ケツペン おつと、貴女は待つていらつしやい……………

アンナ 何故ですか、どうしてですか？

ケツペン 私が貴女を可愛いがつてあげたいからさ。

アンナ 恥知らず！

ケツペン 待つていらつしやい。此處で、あの男がさう頼んで居ましたよ。

アンナ ケツペンさん。妾はその人に會ひ度いんです。貴君が此の部屋から出ていらつしやらないのなら、せめて坐つてゐても黙つていらつしやらないなら、矢張り妾は出て行きます。

ケツペン 何故ですか？私は貴女に一寸お話しし度い事が有るのですが。アンナ、貴女は物語りの中の人の様に、限り無く、罪深い迄に奇麗です……………

アンナ 光榮の至りで御座いますわ……………

ケツペン この様な美しさを投つて置くのは勿體無い……………

アンナ え、勿論、私にはレースや絹や、毛皮や、ダイヤモンドが必要ですよ。けれど、ふん——
何處からそんなものを持つて來るのです？

ケツペン アンナ！

アンナ え、勿論、貴君は喜んで何もかも下さる事でせうよ。まだその外に海邊の別荘だとか、自動車だとか、何だとか、かんだとかつて。さうしたら妾は社交界に出て行きます。妾が何處からそんなものを入れたか尋く人はありますまい。妾はクレールヘンとは違ひますからね。ピロードと貂の毛皮を身にまとつた王女にだつてなれます。××の血筋が通つて居るのかと思はせる様な微笑をする事さへ出來ます。ハ、ハ、ハ！妾の廻りは男達のペコ／＼する頭で一

杯で、まるで無数の油虫の様です。だけど貴君は——妾の主人です、妾の君主様です………どうして貴君を愛さないで居られませう？貴君は若くて懶功です。妾の愛で妾の君主様を虜りにして仕舞ひ、奴隸にして仕舞ふ程、貴君を幸福にする事が出来たらね。

ケツペン　　アンナ、貴女は………

アンナ　　ケツペンさん、妾がずつとく前にこんな事について空想した事があるのが信じられませんか？

ケツペン　　空想する必要などこにありますか、唯手を伸しさへすれば。

アンナ　　どうしてあの人達はやつて來ないのでせう？ねえ、ケツペン………あの人………私の可愛い人なの。それこそ——妾達の理想の爲めに闘つて居る人なんです。妾の英雄………それに引きかへ貴君は滑稽なブルジョアです。若し貴君がゴルコンダの街やペルーを持つて居たとしても彼の人とは比べものにならないでせう。どんな事があつたつて………彼の可愛い人の望み一つにも、一度の呼吸にも、比べる事は出来ません………だけど貴君のゴルコンダ——アツ——それは貴君のものぢありません。妾達、労働者は貴君方の「所有物」を××取らうとして居るのです………ハ、ハ、ハ………！貴君はまあ何て苦々しい、憐れつほい様子をして居

るのでせう。貴君の仰言り度い事は判つて居ます。貴君は屹度こう仰言り度いんでせう。「俺は今直ぐ警官を呼んでやるぞ」つて………（面白さうに笑ふ。）

ケツペン　警官を。何故？貴女の男つて云ふのは多分高潔な人間なのでせうよ。勿論、その男が朝早くクレールヘンの處にやつて来て、いきなり私の上衣とズボンを注文したのには私も少々驚いて居ますがね………併し、其處に何か犯罪が秘んで居やう等とは考へられません。で貴女の可愛いお方の政治問題が、私をして忠君愛國主義者か何かの様に警察の力を借りるに至らしめる等とは思へませんな。

アンナ（笑ひ乍ら）　妾はちやんと見當が付きました。妾達は貴君を知つて居ます。妾はこんな事迄知つて居ます。貴君は綺麗な女の前でデレ／＼する様な——歴然とした、明確な意志を持つていらつしやる。で、例へば、貴君の家で革命家が着替えをしたと云ふ事を知つて居ても警察を呼ぶ様な事だけはしませんね、妾は貴君がどれ程くだら無いかを知つて居ます。貴君のくだらなさときたら天下一品ですわ。併し若しもの事が有るといけないから出て行つてこの家の近所の通りで、妾の可愛い人に逢ふ事にするわ。（立上る。）

（クラ、とフリッツツ登場。）

フリッツ　　アンナ？

（アンナ、彼に身を投げて、彼を抱いて長い間接吻する。クレールヘンは泣き出しそんな様子をして微笑んで居る。）

ケツペン　　御馳走様ですな！

フリッツ　　貴君が御主人ですか！

ケツペン　　さうです、俺はこの家の主人です。誰が此の男のもてなしをしたか知り度いんだ。

クレールヘン　　妾達は皆な貴君にしやべつて仕舞ほふと決心したんです、アドルフ……………この人

はアンナの許婚者のフリッツ・シユタルクです。レオ伯爵が彼の命を援けてくれました……………併

しレオは戦死して……………仕舞ひました、でフリッツは戦地から脱走しなければならなかつたんです……………

ケツペン　　勿論、××主義者なんだらうな？

フリッツ　　××主義者である事を非常な譽りに感じて居ますよ。

ケツペン　　うん……………お勝手に……………君は私の家につか／＼やつて来て、私の許可も得ずに私の

上衣を無断着用に及びましたね。話を續けて居たまへ。（出て行く。）

アンナ　　行きませう。

クレールヘン　　何を云ふの。此處は絶対に安全よ。外に何處で會へる積り？通りで？だけど、御覽なさい、雨が降つて來たわよ。

アンナ　　腰掛けませう、フリッツ、フリッツヘン……………何て變つたんでせう。瘠せたわね、一人前になつたわね……………この鬚……………妾のフリッツ……………妾は、貴君が捕つたもの、殺されたものと思つて居たわ。

フリッツ　　グラツク・ロータの事を聞いたかい？

アンナ　　妾、あの人の宣言を繰返して讀んで居ますわ。こゝでは皆んながあの人の話しをして居ます。お父様はあの人の事を若い勇士、未來の秀れた指揮者だつて云つて居ます。

フリッツ　　あれは——僕だよ。

アンナ　　フリッツッ！フリッツッ！（喜びの吐息をつく。）おゝ、フリッツッ！フリッツッ！（彼の抱擁に身を委せる。）

クレールヘン　　唯、用心だけはなさいよ。

フリッツ　　ハ、ハ。用心しますよ必要な限りは。何も頭を使ふ事は有りません。虎穴に入らざれ

ば虎兒を得ずです。この規則は僕の心に深く刻み込まれて居ます。ところで僕は今一寸心配なのだが、貴女のケツペンがね……行かう……アンナ、カフェー・ド・パリーで亦逢ほう。彼處は人で一杯だから、目立たずに居られる。僕はもう一度、身成りを變へて、それからぢき君を見付けだすよ。直ぐに裏口から送つて下さい、クレールヘン。ぢあ……又直ぐ逢ほう。

(アンナに接吻し、クレールヘンと出て行く。)

アンナ(一人で) 危つかしい人達……だけど立派な人達だわ……あの人は妾達の長所を皆んな備へてゐる様な人だわ。妾達の、労働者のジークフリード。

(ケツペンと二人の警官登場。)

ケツペン 可愛らしいアンナ、この方々がシユタルクさんにお會ひになりたがつてゐるんだが……
アンナ(笑ひ乍ら) 貴君は警官を呼びましたね。シユタルクさんは出て行きましたよ。彼の人に仕事は澤山あるんです。一週間の中に全マフトシユタットを立ち上らせなければなりませんからね。

警官 本官はお前を逮捕する。檢察官殿、訊問の用意をなさつて下さい。

ケツペン 灰色の洋服を着た野郎です……顎鬚の生えた……帽子はどんなのだつたか覚えて

居ません。

アンナ　貴君には判りさうもない事ね、ケツペン。(笑ふ。)貴君の負けよ。

警官　本官について来い。

アンナ　監獄へかい？もう飽き飽きした。あゝ、ケツペン、妾がどんなに愉快だか判つたら……
……百度ぢだんだ踏んでも追付きあしないわ。

(笑つて、警官に引かれて行く。)

ケツペン　横つ面を殴られた様なものだ。癢に障る。癢——に——障——る。

(從僕登場。)

從僕　伯爵夫人ララ様から御電話で御座います。

ケツペン　伯爵夫人ララ……うん……こう云つてくれ……俺は不在ぢやと云つてくれ。

一寸待つた……夕方電話を掛けてくれる様に云つてくれ！癢に障る……

——幕——

第七場

宰相の書齋。秋。大公は海狸の襟のついた毛皮の外套を着、帽子を被つて居る。太つた、眞赤な顔をしたベレンベルグ將軍が歩兵の軍服を着て、若々しさうにして居る、秘書ペトリッツ。

大公　残念だ！將軍、氣狂ひの様な速さで話をしなければならぬ。狀勢はどんづまり迄迫つて

居る。俺は宰相抜きでは決心の臍を固める判けにはいかん。

ベレンベルグ　かまひません、殿下。何でも御座いませぬ。萬事、私にお任せ下さい。我々は二十四時間以内に奴等を鎮壓し、次の二十四時間以内に謀反人共を檢擧してお目に掛けます。唯眞直ぐに眞理に直面しなければなりません。この國內の畜生共に比べれば、昨日の敵の方がずつと我々に近いものです。奴等は最後迄ひどい目に會はせて、血の海に溺らして仕舞はなければ駄目ですが、昨日の敵は終り迄讓歩しながら籠絡すればよいので御座います。

大公　俺は宰相が居らんで問題は決定する事は出来ない。私は非常に心配だ。陰謀は至る處で行はれて居る。古い近衛×さへ信頼出來ん。穢はしい世の中は、總ての愛國者達を俺から奪ひ取つて行く。結局、謀反人の誰かが俺をも捉へる事が出来る様になるだらう。將軍、俺は番兵

の傍を通る時に、彼等が私の背中に鐵砲の彈丸を××みはしないか等と考へて心配して居るのだ。

ベレンベルグ　失禮で御座いますが、殿下、それは恐怖病で御座います。

大公　反對だよ。軍人の言葉にかけて云ふが、俺は冷靜だ。併し、思慮する事無く獨裁を宣するのは恐怖に耽る事を意味するものだ。さうだ、さうだ、全く今こそ慎重な對度を取る可き時だ。俺は宰相が居らんでは問題を決定する事は出來ない。ペトリッツ、宰相は俺等が此處に來る事を知らなかつたのではあるまいな？

ペトリッツ　謹んで申し上げます、殿下、宰相は充分よく存じて居られました御座います。併し突然、目が悪くなりました爲、大變驚きまして、早速とザーヤッツ博士を招びました處、博士は眼の神經に電氣光線をかける爲めに、早速宰相を自分の研究室に連れて行かれました。大變危険な病氣で御座います。時々發作の起る神經痲痺は、思ひ切つた手段を講じない限り、慢性になります。宰相閣下は最近、常に昂奮して居られ、その上超人的な働きをして居られましたので。總べての事が神經衰弱のために起つたので御座います。極く近頃では殿下、宰相は夕暗みの中では目が見えなくなつて居りました。宰相閣下は車に乗り乍らかう申されました。殿

下にお傳へして呉れ。盲になつたとしても、目が治つたとしても——一時間すれば俺は戻つて来る。」

大公 弱り目に祟り目だ………(毛皮外套を取り、帽子をぬぐ)待つて居やう………(坐る。)あの太砲はどこで響いて居るんだ？

ベレンベルグ あれは我が軍が首府の町外れの、クラインマリインの水×を包圍して居るので御座います。

太公 何もかもお仕舞ひだ………どう型がつくものやら？早くきまつて仕舞へばいゝが。

(扉が開いで、黒衣のフォン・トゥラウ伯爵夫人が眞蒼の顔をして出て来る。彼女の後にはおどくしたラ、が續いてゐる。)

宰相夫人(大公の)近づき乍ら) 妾は殿下が此處にお出でになるのを存じて居りました。

大公 伯爵夫人………

宰相夫人 妾は殿下に敬意を表しに上つたので御座います。

大公 それはどうも………

宰相夫人 殿下にお願いがあるので御座います。

大公 どんな用件ですか？

宰相夫人　妾の息子のレオとロベルトとを戦地から送り歸して下さいます。

大公　何と云ふ事だ………（ペトリッツに）もうこんなに迄、成つて仕舞つたのか？

宰相夫人　あ、判りました。殿下はあの子達を二人とも死んで仕舞つたのだと暗にお仄めかしになつたので御座いませう。殿下、そんな事は何の意味も御座いませぬ。殿下は國務多忙に渡らせられて、生命のほかの面をお考へになる御隙が無いのです。けれど妾は澤山隙を持つて居ります。妾は死などと云ふ事は決して有り得ないと信じて居るもので御座います。殿下。あれ達は二人とも生きて居ります、それに比較的健康で御座います。妾はあの子達と何時も結びついて居ります。

殿下　私も善良な基督教徒として、魂の不滅を堅く信じて居ます。

宰相夫人　でも貴君にはその事が少ししか判つておいでになりませぬ、殿下。

ラ、　殿下はお急がしいのです。殿下に御迷惑をおかけしてはいけません。

宰相夫人　殿下、此の可愛相な娘は、生命の此の一面で、大事な人々を失くした爲めに大變落膽して居るので御座います。此の子の事はお氣にお止めならない様に。妾はごく簡単に妾の仕事をお知らせしませう。この恐ろしい戦争で戦死した者達は、他の一面で生き永らへて居ます。

其處で彼等は自分の軍隊の適當な部署に著き、その軍隊は段々、段々、段々、成長して居ります……そしてレオは其處のノルドランドの軍隊の第四騎兵聯隊に、ロベルトは——百年前に死んだゲルバルト・ゴットゲルフが直々指揮して居る第十四砲兵聯隊に所屬して居ります。ですから、あの子達を兵役免除にしてやつて戴き度いので御座います。あの子達はもう一度殺されて妾との連接が無くなつて仕舞ふかも知れませんが。後生で御座います。妾は御覽の通り、冷靜でちやんとして居ります、もう一度子供を失くす事は、——お、殿下、そんな事は出来ません、そんな事は出来ません！妾の理性はこの考へに惱まされて居ます！御生でございませ、殿下、無理に御願ひ致します！貴君の若々しい魂をこの母親の呪ひで貫かす様な事をさせないで下さいませ……

大公　可愛相な病人だ！連れて行つて上げ給へ！

(ペトリッツとラ、が彼女の腕をとる。)

宰相夫人(むつとして)　あ、さうですか？さうですか、憐みのない暴君、この地上の惡魔の使はし者？さうですか？そんならこうしてやる！妾はお前を呪つてやる。レオ、レオ、聽えるかい？そしてお前は、ロベルト？妾は彼奴を呪つてやつた！彼奴は死んで居るんだ！彼奴は死んで居

るんだ！で此の事が判らないのだ！……

(彼女は無理矢理に連れ去られる。)

大公　この世の中が悪夢の様になつた。

ベレンベルグ　未だ三つの河あたりでございますよ。

大公　君は××が起るだらうと思ふかね？

ベレンベルグ　はい………動搖して居る貴族達とどん底から匍ひ上つた獣、人喰ひ人種との間に

全世界に亘る虐×が起るだらうと思ひます。私は兩者の間に悪魔の様な残酷な事が引續き繰返されるだらうと豫測します。

ペトリッツ(戻つて来る。)　労働大臣フレイ氏がお見えになりました。

ベレンベルグ　私はあの生半可な先生が早速私達の邪魔をしはしないかと思ふのですが。

大公　いや、いや。彼の男は非常に賢明だ。私は勿論彼の忠言に耳を傾け等はしないが、彼の意見を知る事、もつと正確に云へば、彼の思想を現はす辯舌を聴く事は必要だ………

(ペトリッツ、禮をして出て行く。)

ベレンベルグ　我々はフレイと對立して居るのです。

大公 君達には類似點があるよ。君達は二人共雄辯家だ。俺はシセロの様な君達辯舌家の爲めに王位を失ひはしないかと氣遣つて居るよ。

ベレンベルグ 私は時に依つてはシセロもかくやと思はれるばかりの……

大公 俺の考へでは、現在は假りに決定期であるにしる、演説をして居る場合ではないと思ふね。
ベレンベルグ 私に辯舌を振ふ權利をお與へ下さい。私は大砲の様な聲で話を致しませう。

大公 靜かに、フレイだ！

(フレイ登場。)

フレイ(慕々しく會釋する) 殿下に拜顔の榮を賜りまして光榮に存じます。人類の爲めに運命的な意義を有して居る日に當つて、私は既に二時間もあちこちと殿下を御探しして居つたので御座います。

大公 我々は宰相を待つて居るのだ。發作を起したのだ。が今直ぐ此處にやつて來る。君も此處に居る。これで皆集つたわけだ。

フレイ 七等官ガムメルが應接間で待つて居ります。

大公 彼も呼んで呉れ給へ。

フレイ　私はそれには反対でございます。第づ第一に樞密員の問題を決定しなければなりません。私は、此處に宰相も居ない事を喜びに思ひます。私は大公の天稟のみが選擇し得、又理解し得る様な提案を出さうと思ふのでございます。左様、私は殿下を天才的な方だと信じて居ります。

將軍は、我々二人の間にあつて第三者たるべき權利を直ちに表明して頂き度いと存じます。

ベレンベルグ　労働大臣は尊大不遜だ。

フレイ　私は、現在、此の室の中で發言權のあるものは偉大な人々のみであると確信して居ます。ベレンベルグ　悲劇のさ中にあつてこの道化芝居には驚きます、殿下。不幸にして殿下は一日の中に二度も理性を悩ます様な事柄に御逢ひになりました。伯爵夫人と……今と。

大公　聞き給へ、あの大砲の響きはどうか？おうむが二羽で囀り合ふ様な、猿が二匹で口論し合ふ様な眞似は澤山だ。今の砲は違つた方向から響いて来る。

フレイ　あれは暴動を起した捕虜の陣營からです。若し必要ならば奴等を絶滅させませう。私の最も進んだ提案を出す事をお許し下さい。

大公　出し給へ。(窓の方に歩いて行つて彼處を眺める。)

フレイ(大公の背後に氣を配り乍ら、話す)　王位は×××、××××様として居ます。どんな方策

にも襲ひかゝつて来るでせう。貴君はその後になつて、氣違ひになる迄反對派に賛成し、それに依てよりよい時代への復歸を容易くする事も出来ます。

大公　俺はとにかくこの無頼漢の考へに心を索かれる。

フレイ　大統領の任務を荷つて居る私は何人よりも、講和の解決及び××主義者打破の問題に心を碎いて居ります。で私は貴君の先手を行いました、今日はまだこの仕事に着手する事が出来ません。併し明日になれば或は出来ないかも知れません。

大公　で俺は？

フレイ　××は××××××なければなりません。ノルドランドは共和國の宣言をするでせう。私は生産業者や教授や労働者からなる政府の頭となるでせう。ガムメルは講和談判の衝に當る判けです。

大公　ペトリツツ！ガムメルを此處に連れて來て呉れ給へ。

(興奮しながら總てを聞いて居たペトリツツは滑稽に、足早やに退場)

ベレンベルグ　御願ひでございます、殿下、不埒者を逮捕する命令をお與へ下さい。

フレイ　私にはもう、貴君が何も了解して居ないと云ふ事が判りました、將軍。

(ハトリツツとガムメル登場)

大公 君は此處でノルドランド資本家の一員として話をする事が出来るかな？

ガムメル はい、殿下。

大公 君は労働大臣の計畫を知つて居るかね。

ガムメル はい、殿下。

大公 君は彼に賛成かな？

ガムメル はい、殿下。共和制及び提携以外に内外の敵からの救助方法はありません。私とフレイ君とはアーチの兩半の如く、水魚の交りをなして参りました。我々はアーチの異つた兩側を支へて居ります。で、我々は今離れて仕舞へば兩方とも滅亡する事になるのでございます。

大公 で俺は？

ガムメル 殿下は現在此處ではXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX。XXXXXXXXXXXX配慮なさる様に御忠告を致します、殿下。

大公 それが一番本當かも知れない………將軍、譲り渡さなければならぬのか？

ベレンベルグ 殿下の御先祖はこの事に對して貴君に注目目の目を向けて居られたのです。

(ペトリッツ、隊長をつれて戻つて来る)

ベレンベルグ 名前は何といふ？ 聯隊は？

隊長 歩兵四十八聯隊、オットー・ブレイトフェルト大尉であります。

ベレンベルグ 何故此處に居るのだ？

隊長 共和國委員會首府守備隊の命令であります。

大公 ノルドランドはもう共和國になつたのか？

隊長 我々はさうなることを心から望んで居ります。

フレイ 隊長、共和國委員の名に依つてベレンベルグ將軍の逮捕を命令する。

隊長 で、ホーエンハウフェン將軍は？

フレイ ×××は今の場合逮捕する必要を認めない。

隊長 將軍、貴官の劍をお出し願ひます。

ベレンベルグ(大げさにサーベルを鞘から抜き、膝で二つに折る) 君は——裏切者だ、併しベレンベ

ルグは忠節を守る。

フレイ メロドラマは抜きにして。貴君は道化芝居のヒーローですな。

ベレンベルグ　俺は君に一言云ふ……………

フレイ　貴君は私に一言も云ふことは出来ません。隊長、君の共和国の義務を果し給へ。

隊長　静かに私の後について来て下さい、ベレンベルグ。反抗は許されません。

大公　狡猾な奴だ、この猶太人め！

フレイ　貴君は御立腹ですか？失禮。女みたいに弱いと云ふことを看板にかける事も出来ません。

ガムメル君、私は仕事で一杯だ。どうか×××がテイフランドの國境に出發する案内をして呉れ給へ。良い自働車で行けば六時間後にはポルドレヒトに到着出来るだらう。

(低く會釋して退場。)

ガムメル　命令する事をお許し下さいますか、殿下

大公　うん……………ガムメル君……………うん……………許さう。俺は君達から出来るだけ遠くに行き度

い。そして出来る限り、君達總てのことを忘れて仕舞ひ度い。

ガムメル(ベトリッツに)　君の書齋から、電話で指令を發していゝかね、秘書君？

ベトリッツ　勿論で御座いますとも、大臣閣下。

ガムメル　俺はまだ大臣ぢあ無いよ。

ペトリツツ　　貴君は一時間後には大臣になられるでせう、尊敬すべきガムメル閣下。

(慕々しく彼の先に立つ。二人退場。)

大公(獨り)　　稻妻の様だ……見苦しいだらうか?(ポケットからピストルを取り出す。) え?見苦し

いだらうか?いや、くだらん……私は生きて居たい。死んだ獅子よりも、生きて居る犬の方が良い……(ピストルを元に藏ふ。)

(扉が開く。ラ、に連られて宰相登場。)

大公　　あ、宰相……君の居ない間に色々な事件が起つた。どうしたのだね?

宰相　　私は目が見えなくなりました、殿下。(手探りで机の方に行き、その傍に脊を曲げて立つて居る。)

大公　　待つて居た事だよ。俺は君が何時も適宜な時に事を成すと思つて居る。が君の眼が無益だと云ふ事は今許りでなく——普斷からさうだつたのだ、しかし、目の開いて居る以前から無害だつたとは云へないよ。

宰相(聲を笑はせ乍ら)　　殿下、どうなつたのでございます。

大公　　どうした?……どうした?……俺は君の好きな、ユダヤの辯護士、フレイの爲めに×××××られ、その上全ノルドランド、全世界は混亂の極に達してしまつた。もとはと云へば

老ぼれの空想家である君が悪いのだ。喜び給へ。君は盲になつたんで君がしでかした事を見ないで済ませるからね。一層の事耳も聽えなかつたなら、もつと良かつたらうに、死に給へ、宰相。死に給へ、ピストルが欲しいのかい？ほら、此處にあるよ………(彼の掌中に自分のピストルを置く。)俺は是の上、君の下劣な、いやらしい様子を見たくはない。(サーベルと拍手を響かせて出て行く。)

(室内に稻妻。)

ララ 何もかも夢の様だわ。妾達は運命に壓しつけられてるのです。(宰相黙つて居る。)パパ何にも見えないこと？

宰相 未だ——何にも。

ララ けれど、サーヤツ博士は又見える様になるつて貴君に約束しましたわ。

宰相 いゝや………まさか………併し、若しかしたら、見える様になるかも知れない。一體どうしたと云ふのだ？今では俺は身も魂も盲だ。何も云は無いでお呉れ。ピストルをとつて、机に入れてお置き。俺は決して自分を殺し度くは無い。さうだ、神の御意が現はれるだらう。

(間。静かにフォン・トゥラウ伯爵夫人登場。彼に近づく。間。)

夫人 本當なのですか、貴君が盲になつて仕舞つたと云ふのはカール？

宰相 さうだよ、ルイザ。

夫人 心の窓を開ける様にお成りなさい。

宰相 一生懸命にやつて見るよ、ルイザ。

夫人 けれど、彼等が貴君の事を盲だ等と無駄口を聞いても、信じるのぢありませんよ。奴等は妾を氣違ひだと云ひ振らしたりして居るのですもの……妾は惻功な女です、いゝえ、賢女です。貴君が盲になつた等と云ふ彼等を信じてはいけません。

宰相 ララ、お母様をお連れおし。俺を獨りにして呉れ。

ペトリツツ（登場。彼の顔には幸福さうな、嘲笑した様子、微笑） 待つて下さい。私は舊殿下の帽子と外

套とを持つて行かなくちやならん。舊殿下はテイフランドに行くのです。舊殿下は伯爵夫人のミツチーに電話をかけて、ハ、ハ、ハ、追放されるんなら一緒にされようつて勧めましょ。處が伯爵夫人ミツチー・フォン。ガトルプはフレイさんの政府の社會的保證のある大臣の御世話に成り度いんだつて答へたさうですよ。ハ、ハ、ハ……（外套と帽子を取る。町寧に辭議する。）舊宰相様及びその尊敬すべき舊御家族様。私は大統領閣下の秘書に鞍變へ致します。御達者で

(出て行く。)

宰相　總てが不思議だ……俺は人間と云ふものを良く知つて居ると思つて居た。併し彼等は思つたよりもつと悪い……これは戦争が彼等を腐敗させ、残酷にさせたのだ。ララ、ゲルマンを呼んで呉れ、彼なら俺を寢室に連れて行つて呉れるだらう。

(ラ、鈴をならす。)

宰相　君主……家族……故國……(やつと立ち上る。)

夫人　生命の他の面迄辿り着かなければなりません。

ララ(もう一度鈴をならす)　ゲルマンは参りません。

(下士官が現れる。)

下士官　何の爲めに呼鈴をお鳴らしになるのですか？

ララ　妾達は召使ひを呼んで居るのです。

下士官　みんな行つて仕舞ひました。秘書が一緒に連れて行つたのです。併し、我々は此處に配置されて居ります。トウラウ家は監禁されて居ります。

宰相(眩掛椅子に坐る)　廢墟だ……何處も彼處も……何處も彼處も……

夫人(文机に向つて坐り、カルタを置いて居る。) 馬……道……道……それから紋章と羽のついた死

人の棺……

ララ(急にヒステリックに泣き出し乍ら) あゝ堪らない、妾は生きるか、死ぬか、この中どつちか

したい。あゝ堪らない、堪らない……

夫人(彼女には全く注意しないで) 何て素晴らしいダイヤがあるんだらう……可愛らしい鐘と銀

の喇叭の音楽……ロベルトが大きな廣い木の下の青い草原で……

ララ(扉の方に身を投げて後、立止る) 妾は出て行く事が出来ない。どうして死ぬ事が出来よう？

(泣く。)

宰相 神様、私の耳を蔽つて下さい……神様、貴君は私を御苦しめになり度いのですか。私は我

慢しませう。

ララ おゝ、貴君の清らかさ……貴君の清らかさ……あゝ……妾には我慢する事が出来な

い。

宰相 お行き、ララ、俺達を残して置いてお呉れ……

夫人 黄色い木の下、空色の草原の上に……

ララ 何處に？貴君方が此處にいらつしやるのを知つてどうして生きて行けませう……妾は死に
度い。

夫人(夢の中の様に) ロベルト、お前はレオよりずつと綺麗だよ。お前はレオを追ひ越したよ。

宰相 ララ、自分自身の事をお考へ。

ララ 私は引金を引く事は出来ません。妾は鐵砲が恐ろしい。

宰相 お黙り……大砲の響きを聞いて御覽。空焼けが見える様だ、俺には叫聲が聞える。

ララ 空焼け……

夫人(夢の中の様に) 道は總ての人に通じて居る、道は總ての人に通じて居る……黒を通つて赤

と紺を通つて……

(舞臺暗くなる。窓は夕焼けで輝いて居る。大砲の音)

ララ 恐ろしいわ……

宰相 お黙り……外ぢあ、何の歌を歌つて居るのだらう！

ララ(聽耳をそば立て乍ら) 労働者の讚歌——インターナショナルだわ。

宰相 ハ、ハ、ハ！フレイはあの歌を共和國の國歌にしたのだ。

下士官(入つて来て) 街路では戦闘が開始されて居ます。我々は若しかすると我が軍から切離されたかも知れませんが。あの×××××の畜生共が此方にやつて來ます。我々は貴君方を外の場所に移さなければなりません。

宰相 俺の準備は良い。唯、俺は盲だ。俺の妻は——氣違ひだし、此の娘は病氣なのだ。

下士官 今は不幸な事だらけで。その事に付いて誰が一番罪があるかは、貴君御自身御存じの筈です。

宰相 それはさうだ……行かう。ララ、ルイザを連れて行つてお上げ。俺には、護衛兵の誰かが手を貸して呉れるだらう。

—幕—

第八場

エレガントな部屋。ロイヤル・ピアノ、食事の用意をした食卓、棕櫚。壁にはゴベリン毛氈。ペトリツツとミツチー、彼女は非常に、豪侈な風をして居る。ダイヤモンドのついた服。

ペトリツツ　え、偉い人ですとも、偉い人ですとも。

ミツチー　え、妾は随分大勢の偉い人達を親しく知つて居たけれど、大統領はその中でも比べものに無らない程偉いの。

ペトリツツ　左様、貴女は大勢の人達を御存じでしたな……併その人達は國家的の人物では有りませんでした。皆んな、役者だの、文學者だの……何にも偉い事は有りません。つまり、コックや爪磨きの偉いのと變り有りませんよ。權力の有る人間——是こそ本當に偉い人間です。權力のある人間は役者に幾らでも拍手をおくる事が出来、又作家に敬意を表する事が出来ません。併し彼等の意見に對して、何か眞面目に論争したりすることは決して致しません。だが彼は自分の戀人の可愛い手を、いや、可愛い足に接吻する事は許されて居ます。何と云つても彼女は彼の戀人であると、同時に奴隷ですよ！同様に九人のミューズの神も強者の奴隷ですよ。

ミツチー　あゝ、貴君の云ふことは本當だわ、ペトリッツ。妾も矢張り、何物よりも力を尊敬しますわ。例へばね、何故妾が殿下に戀したかつて云へば、唯彼の方が××だつたつて云ふことからよ。その上、彼の方も馬鹿ぢあ無かつたわ。だけど馬鹿だつた方がよかつたかも知れない。馬鹿でも、懶功でも無いのは置き處が無いものね。野暮に勿體ぶつてゐて、兵營と儀式とをこつちやにした見度い。戀は、その、壓付ける事の出來無いサデイズムと同じで、その上直ぐに飽きて仕舞ふものね。結局の處、何時も何時も濕布とトツカピンが必要な、とても惰しのないものだわ。

ペトリッツ　殿下はどうです？總てのものが與へられて居乍ら、その總てのものを失つて仕舞ひました。だが大統領は？牛乳屋の倅です。子供の時は靴もはかずに飛び廻つてゐました。十七の時には仕方が無いので植民地に送られました、だが今では——ノルドランドの大統領です。

ミツチー　ねえ、ペトリッツ、妾はかう思ふわ。貴君はとても猾くて、他人の災難を嬉しがる人だつて。だけど、妾ははつきりとかう思ふことが有るわ。貴君は本當にフランクが好きなんだつてことをね。

ペトリッツ　ねえ、伯爵夫人、私は貴女を、その、その、非常に魅惑的なヴァンパイヤだと思ふ

のですが、實際は貴女は大統領に戀してゐるのだと、かう考へられる時もあります。

ミツチー　妾は彼の人を尊敬してゐます。彼人は——驚だわ。そして彼人はどんなに多くの性格を……どんなに多くの空想とを持つて居ることせう……妾は愛のことを云つてゐるんですのよ……煙草を一本頂戴。(喫らす)妾は彼の人を尊敬してゐます。妾達のかうしたむつまじい夜々よなくが素敵ぢあ無いこと?あの人とはとても色んな風に變るわ。道化者、疲れた騎士、情熱の分拆者……エロチツクの實驗家で、發明家。で彼人は何時も、健康な雄が持つてゐる張ち切れる様な性慾で一杯なのよ。

ペトリツツ　全く、それでこそ愛する甲斐が有ります。が併し、あの人を愛してゐるのは貴女でも無ければ私でも無いのです。

ミツチー　亦、パラドツクスね。

ペトリツツ　貴女は先づ第一に、我々が彼の召使ひであると云ふことに氣付かれるでせうよ。

ミツチー　貴君はかう悪い、やくざな考へ事が好きなのね。

ペトリツツ　でそれが本當だとすれば……いや、召使ひはこんな風に主人を愛することは出来無いものです。彼が主人である間は彼にかしづいてゐるのです。併し、フレイが失脚したら、

我々は彼に随つて、落ちのびて行くでせうか？我々は××にも、宰相にもついては行きません
でしたね。(間)。隠さずに話して下さい。

ミツチー 若し、彼の人失脚したならそれは彼の人弱いかからだと云ふことになるわ。だけど
妾の愛してゐるのは力よ。

ペトリツツ 占めた。私と貴女——秘書兼従僕である私と戀人兼召使ひ女である貴女とは光榮あ
る人の分捕品である大衆の一部の代表者ですよ。

(ベレンベルグ登場。彼の赤い顔は輝いて居る。彼は手を擦つて居る。)

ベレンベルグ 喜んで下さい。×××××共が逮捕されましたぞ。あゝ！實に嬉ばしいことだ。

カヴェニヤーク、シユワルツエンベルグ、ラデツキー、ガツリフェー——もう少しそつちに行
つて下さい。このエベルガルド・フォン・ベレンベルグも一緒に坐らせて下さい。

ミツチー 貴君は×××××達の血を随分流しましたわね。毎日その血でお風呂を立てたら、貴
君が百迄生きたとしても、一生足り無くなることは無いわ。

ベレンベルグ 勿論、その通りです。今では表面上の戦ひは殆ど消え失せました。俺は奴等を片
つ端から斬殺しましたよ！奴等は潰滅して仕舞つた。フリードリヒ・シユタルクは××の殘黨

と一緒にグラウベルゲンにゐる。我々は奴等をさう早くは粉砕する事が出来んかも知れんが、奴はもう殆ど傷き切つてゐる。これと云ふのも右翼と中間派との神聖なる同盟の御蔭だ。

ペトリッツ　　ですが、これから先は？今後、若しかすると同盟者達の不調和を來すかも知れませぬね。勝利を獲たものゝ間には有り勝ちな事で御座いますよ、將軍閣下。

ベレンベルグ　　つまらんことだ。これから先何が起らうと、君がそれをかれこれ云ふ筋合は無いよ、ペトリッツ君。政治に於いては、實行家で無ければいかん。

(フランク・フレイ登場。)

フランク・フレイ　　おい、政治の談しは何もせんで呉れ。これから先きの政治の談も眞平だ。疲れた。伸びをし、邊りを見廻す。俺を楽しませて呉れ。その代りに俺も皆を楽しませてやるよ。

ペトリッツ、ドアの鍵をかけて呉れ。酒と食ひ物は一際君にまかす。召使ひの面は一人も見えん様に。疲れた。テーブルの用意をして呉れ。長椅子に横になる。ミツチー！(ミツチーは彼の方に走つて行つて、彼に接吻する。そんなに亂暴にせんで、お馬鹿さん。ひどく面白い髪を結つてるね。(彼女に頼ぐりする。猫さん。ペトリッツ、將軍と一緒にテーブルを此の椅子の方に動かして呉れ給へ。(彼等、その通りにする。)それで……ミツチーが俺にサンドキツチを少し作つてくれ

る、と。何はともあれ、上等の白葡萄酒を持つて来い。俺は疲れた。皆は彼にかしづいて居る。彼は飲む。勝利だ、ミツチー。赤い悪魔共は撃破された。いや、ベルンベルグ有難う、有難う。

(坐つて飲む。)飲んで、食ふんだ。今日はミツチーが俺等の爲めに踊つてくれるよ。

(彼は以下すつと、飲んで居る。一緒に居るものも皆、數へ切れ無い程飲むが、中で一番、何回も、澤山飲むのはフレイである。)

ベルンベルグ 今日には仲々の御氣嫌ですな、大統領。

フレイ 今日には萬歳だ、本當に萬歳だ。俺はお山の大将だ、そしてつまづく危険は無い。斷言するよ、將軍。(飲む。)飲むんだ。飲むんだ。

(皆、飲む。)

ペトリッツ 祝盃……婦人の名譽の爲めに、私の最初の祝盃をいたします。奔放なる詩を歌ふことを御許し下さい。そして、韻を踏んでゐるのに御注意願ひます。

フレイ 許すとも。それに、ミツチーが許してくれるよ。(飲む。)

ペトリッツ

アーチの下の我がもとに來れ、

我、汝に贈物をば捧げん。

我、我が伯爵夫人に

春の香りを捧げん。

汝、嘆息をつけば現れしは薔薇よ！

冬の嚴寒をば忘れよ。

リュツイ・ペトリツツは情熱に満ち杯れ。

汝が裝飾みかざりを崇ふる心満ち杯れ。

歌、唱へよや、おゝペトリツツ、

静まれる革命の唸りの下に。

フレイ　ハ、ハハハハハ………何と素晴らしい道化者がペトリツツから飛び出したのだ。

御油断めさるな、

人は皆、急いで行くぞ。

御生大事に詩を抱き込んで、

こりや道化者！眠るまいぞ！

一同拱笑する。

フレイ さあ、さあ、君達詩を讀んで見給へ。さあ、ベレンベルグ、即興でやるんだ。

ベレンベルグ 何をか厭ふ可き？ベレンベルグが言葉を探しにポケットの中にもぐり込んだなんてことはまだ且て、誰からも聞いたことが有りませんよ。

生活に餘り有れば 争ひあり、

刀劍は決す、生命の争ひ、

死は鎌もて生命を左右す。

生命は唯、闘ひに依てのみ得られぬ。

フレイ 素敵だ！——ミツチー

ミツチー 御免蒙るわ。妾は詩なんてものは下らないものだと思つてゐますの。妾は言葉の手品

使ひでは有りません。言葉の遊びで以て、苦勞するなんて好い商賣を見付けたもんですわね。

妾、すつかり酔拂つちやつたから、踊をやるわ。

フレイ シヤンパンだ！コルクを天井迄ぶつつけるんだ、ペトリッツ。

(ペトリッツは坐戯乍ら、シヤパンの蓋を開ける。)

ベレンベルグ 唯一つ残念なのは、ガムメルと一緒に無いことだ。

ペトリツツ それから……それから……御婦人がたつた一人しか居られんことですね。併し、これは大統領閣下が、私達に羨ましがらせる様にわざとなさつたことですよ。

フレイ その通りだ！ガムメルがゐないのは、あいつが荷を負つた獣物だからだ。奴は年がら年中、働いてゐなければならぬ。何の爲めにガムメルには休息が必要なのだ？奴は自分の資本の爲めに労働してゐる四つ足だ。奴には人生のことが何にも判らん。俺はかうやつて楽しんでゐる此處では、奴が大嫌ひだ。併し、向ふでは——俺の事務室では彼を尊敬する。うん、で女がゐないのは、俺が女嫌ひだからだ。牝鶏なんてものは下らんものだ。フイツ！お前だけは何とか我慢してやるがね、ミツチー。だが、この壇はお前よりもつと馬鹿々々しいよ。

お前は此處ぢあ道具だ。酒、果物、家具、壁、電燈、人間……存在してゐるものは唯俺様だけだ。俺だ……フランク・フレイだ……ハハハハ……直ぐに酔拂ふつて云ふのは俺の唯一の弱點だ……我が親愛なる諸君、俺を信じてくれ。俺の名譽にかけて云ふ言葉を信じてくれ。君達は三つの幻だよ……ハハハハ……世界は俺の自由になる捏粉の様になつた。と云ふのも俺様がとても懶功だからだ。俺は世界で唯一の、本當に懶功な人間だ……だから

君達皆なが、捏粉になつて仕舞つたんだよ。影法師だ……俺の奴隷だ……ヨーロッパもアメリカも……（立上つて……ぶら／＼歩く。）祝盃を舉げよう……専制政治の爲めに……（笑聲。だ、さう云ふ俺自身、突立つてゐることが出来んわい。（坐る）ペトリッツ、間抜け！お前、何か混ぜたな？俺はこんなに早く酔つたことは一度も無い。歌だ！ペトリッツ、歌へ。ペトリッツ、ピアノに向ふ。）

歌つて進ぜん、吾が友よ、

我此處に、メフィストフェレスの競争者としてぞ現はれたり。

我に御世辭をおめぐみ下され。

さて。ド・ミ・ハ・ソ・ラ。

メフィストフェレスの蚤の歌、

歌ひませうかえ、エツヘツヘ

無論、蚤めは王様の手から

ほんとはかりに投げだされてゐたが、

デモクラテイツクの世の中では、

蚤にも道がありますわい

それも飛切り上等な——

フレイ うん、さうか。大方、俺のことを諷刺しやうとしてゐるんだらう？

ペトリッツ 私は貴君をお樂ませしておりますので。

フレイ 見てゐるろ、まかり間違ふとお前の面に酒壺が飛んで行くぞ。

ペトリッツ

昔々、蛋が一匹おりました

アハハアハハハ

ピヨン／＼、猿智慧、人悪で、羊の鬚の中へもぐり込んだ。

フレイ その歌、中——止。檢閲だ。

ベレンベルグ 大統領は酔はれてゐても本性は違ひませんな。

フレイ や將軍、君は仲間だよ！ハハハハハハハ（彼の方に身を伸す。）接吻をしやうぢあ無いか。

君は——黙つて居給へ、勳章をつけたシセロは黙つてゐる事が出来ないんだな。花火將軍だ。

俺は君を知つてゐる。君は自分がとてもずるい人間だと思つてゐる。併し俺は君達のことなら

何でも知つてゐるよ。ハハハハハ……右翼から謀反を起すか？×××××共が没落したので昔の夢を見初めるか。彼の鼻の直ぐ下で指を振り廻す。駄目、駄目、駄目。フランク。フレイは偉大な男だ。何でも見てゐる。何でも知つてゐる。君達なんかを危むことは無いよ。

ベレンベルグ 兎に角、そんな愚にもつかない疑ひは唯。恐怖を起させるのみですよ、親愛なる大統領。(彼の肩をたたく。)

フレイ 君が危険になれば、俺にも俺の手段が有る。(口笛を吹く。)それに、ベレンベルグ、君は行く先々でひどく憎まれて居るぞ。君は労働者の血で濡れて居るからな。

ベレンベルグ 貴君も御一緒ですよ、大統領。

フレイ いや……俺はそつほを向いて居た。直接、手を下したものに責任が有る。ベレンベルグ君はボルゾイ犬だ。うしうし、けし掛けられて、奴等をハツ裂きにしたんだ。だが俺の手は白くて、清れいだよ……(兩手を挙げる。)見たか、ベレンベルグ？政治の事はもう澤山だ。

ミツチーが踊りをやるよ。ミツチーが……シツ……こりや、神祕劇が始まるぞ。裸で踊るんだ……うん……靴下止めだけは取らないでも許してやらう。ペトリツツはピアノに向つて居ると。今日は何だか飲み度くて飲み度くて堪らんわい。どんく、酔拂ふんだ……電燈が

目ばたきをして色んな事を教へてくれるわい……だが電燈なんか無くても、俺は何でも知つとる、君達の事は何でも……それから、兎に角——それから休むんだ。俺が休む事が出来るのは勝利を獲たからなんだ。俺は眠る事が出来る。俺は飲む事が出来る……俺の邊りには危険は無い。萬歳だ！着物を脱ぐんだ。ミツチー。俺と一緒に踊つてやる……それからベレンベ
ルグもな……女と熊と猿の踊りだ。俺がまだ子供だつた時にや、何時も上手に猿真似をやつたものだ。（顔をしかめて、猿の真似をする。室中、大笑ひする。）

皆、泥酔して居る。そして益々酔拂ふ。）

ペトリツツ　私はもうへべれけです……ピアノに向ひ、調子外れな、グロテスカなマーチを弾く。）

ーラスをお願いします。私が歌ひますから

自由になつて、何もかも、

禮儀を忘れ、何もかも、

氣になる事も消え失せて、

飲め、飲め、飲め、飲め。

その時や、我等の「俺様」の祝ひ。

ニン——人間——ゲン——豚。

コーラス さうだ……さうだ……

その時や、我等の「俺様」の祝ひ

ニン——人間——ゲン——豚。

ペトリッツ

そこで、三日天下の王様は

従者の様に、俺達集めて、四重奏

熊の様なるバスの將軍。

道化は——秘書役、口笛吹いたり踊つたり、

それに女は——此奴は内密、内密、

自由なブ、豚の四重奏。

コーラス さうだ……さうだ……

それに女は——此奴は内密、内密、

自由なブ、豚の四重奏。

ペトリッツ

俺や癩だよ、だがまあく、

今日は皆なが阿房になつて、

石を隠しな、拳固を開け、

さあさ、兄弟、歌へや、歌へ、

地上の思想を征服したり、

三日天下の豚の天國。

コーラス さうだ……さうだ……

地上の思想を征服したり、

三日天下の豚の天國。

(踊り。)

ミツチー 今のは、とても意味深長な歌だわ。どんな意味深長な歌だか、判つて？あの歌は世界

の本質の蓋を開けてくれるわ。あの歌は生活の意義を説明して居るのよ。何もかも御許しが出

て居るから、妾も今なら何をしやうと賛成する事よ。放蕩万歳！

フレイ(酒盃を手にして立上る)

我輩は大變、酔酩して居て、演説をするのが難しいんで有る。

我輩の舌がよく廻ら無いんである。誓つて云ふが、我輩は眞實のデマゴギイや、デモクライトであつたハ……ハハハハ……我輩の目論見はトウラウ爺さんよりも お前よりも、誰よりも
××××共……狂信者共よりも優れて居たのである。我輩はかゝる目論見を立て、勝利を得て、大統領になつたのである。敢て云ふ。我輩は豚であり、諸君も亦豚である。しかして諸君は豚である事が出来る、何故なれば我輩がそれを許すからである。又我輩は自ら喜んで豚となるであらう。何故なれば我輩は勝利を得たからである。かるが故に、ペトリツツは賢者である。

その時や、我等の「俺様」の祝ひ。

ニン——人間——ゲン——豚。

(ミツチーが突然、キヤツと叫ぶ。)

ペレンベルグ どうしたんです？

ミツチー 今の響きが聽えなかつたんですか？恐ろしい。まるで百万の呪ひの様です。

過去の……現在の……未來の……

フレイ　ハハハハハハ……飲み過ぎたんだよ……ロマンチストになる迄、飲み過ぎたんだよ……
……ロマン……ロマンチツクな錯覺を起す迄にね、メネ、テケル、ファレスか……ハハハハ
ハハ……着物を脱いで踊るんだ、ミツチー！コーラス！

（四人、抱き合つて、舞臺前に出て来て、よろ／＼する。）

さうだ……さうだ……

地上の思想を征服したり、

三日天下の豚の天國。

——幕——

第九場

グラウベルゲン。街はコンミニストに占領されて居る。舊知事邸の大廣間。一つの長い机が食卓に用ひられ、他の一つは事務用に供せられて居る。陣營のつくり。朝。フリッツ・シュタルクが古い椅子に腰掛けて居る。彼は非常に疲勞困憊して居る。時々假睡して居る様子さへ見える。アンナは繩で結ばれたトランクの上に坐つて居る。彼女の前にはゼツペルが立つてゐる、彼とフリッツは軍服、部屋の隅々には澤山の銃が置いてある。扉の傍には機關銃がある。

ゼツペル　望みを棄てる事などは無い。僕は一日お爺さんと君を見た時直ぐに、我々も一緒に滅びて仕舞ふのだと云ふロマンチックな考へが君の頭に浮んだのを見てとつたよ。併し君は疑つてゐるが、俺達の勝利は直ぐ目の前だよ。

アンナ　妾は決して絶望などしはしません。古い友達のシユタルクは實際、英雄的な沈んだ氣持とでも云ふ様なものを持つて居るんです。

ゼツペル　何もかも下らな事だい。ガリカンは明日にも革命が迫つてゐる。僕は社會主義ガリカン共和國設立の電信がリュテツツイから來るのを文字通り待ちわびて居るのだ。そうすれば此處も萬事連絡がとれる。グレフト將軍の軍隊とは目と鼻の先だ。

フリッツ　アンナ、それは皆んな本當だ、ゼツペルは本當の事を云つて居る。俺達の最後の勝利は少しも疑ふ餘地は無い、併し何もお互に自分の幻滅を語るのを隠す必要は無い。若し何か奇蹟が起つたなら　喜びの時が来るだらう。併しより悪い場合、即ち計畫が目茶々々になり決定的な屈辱を受ける様になつた場合に備へて置いた方がよい。で今俺が考へてゐる事は皆んなを振ひ立たせ、後々に種を抜いて行く様な死方をする事だ(間)ゼツペル、當てにもならない事でアンナを慰めてくれなくても良い。アンナは——勇敢な娘だ。俺はとても疲れた、これが何よりも俺を悩ますんだ。何處からか力を引づり出さなくつちあなあ……だがアンナとお爺さんには嬉しい。我々のお爺さんと我々の女の同志は此處から逃げて行かない許りか、苦勞を重ね死ぬ爲めに此處にやつて來た事を俺達は忘れちあならない。今こそ空想的な俺達の眞實と、俺達の眞面目さとがあるのだ。英雄になる時が來たんだ。(間)寢たい。だが、ぐつすり寢込んで仕舞つたら、何かの場合誰も知る事が出來ない。どうだ。ゼツペル、椅子の上ででも、一分間でも、眠れると思ふかい？

ゼツペル　死んだ様な静けさだ。眠り給へ。一寸でも必要が生じたら起こしてやるから。行かう、アンナ。

アンナ　妾は此處に坐つて居ます。お爺さんは眠つて居る。フリッツも眠らして置ませう。だ
けど、妾はこの人の傍に居ます。妾は随分永い間この人を見なかつたんです。そして若しかし
たら、もう直き見納めになるかも知れませんかから。

フリッツ（微笑み乍ら、夢見る様に）　いゝ事を云つてくれた、アンナ、何だか妙な夢を見る様だ、夢
を見やう（頭を椅子の中に埋める。）

アンナ　ゼツペル、もつと具合よくしてやれないかしら？

ゼツペル　何でもないさ。今は慰めて等居る場合ぢあない。さうやつてでも眠らせてやり給へ。

奴は此處四晝夜と云ふものトロツともしなかつた。僕は外に行かう。何か事が起つたら、起し
に来る。（去る。）

（アンナ立上つて窓際に行く。眺める。戻つて来る。銃を取り、手にのつけて重さを計り、照準を定め
る。又銃を隅に置く。カルタの置いてある處に行つてそれを調べる。）

フリッツ　アンナ、僕は眠て居ないんだ、話をしやう。僕達は滅亡するのだ、アンナ。お前はそ
れが疲勞のせいだと思ふかい？いゝや、疲勞はこの不滅の軍隊の兵士がどんな死方をすべきか
と云ふ事を、僕に教へてくれる邪魔をするだけだ。だが僕はどの秘密火薬入れに最後の火薬が

未だ貯へられてあるかを知つて居る。

アンナ(彼の方に近寄つて強く彼を接吻する) 妾の……………妾達のジークフリード。

フリッツツ お前は僕達のワルキーリヤだ。何て奇麗なんだ！お前は奴等の自由にされてはいけない。もう救はれる道が無いと思つたら屹度自殺をするんだ。兎に角、僕達の鼠落しにかゝつたのが悪かつたのだ。お前は生きて居て、黨の爲に働けたのに。が、それはさうと此處に居るものは——鬪争の一手段としての戦死の事を、最後迄考へなければならぬ。アンナ、誰かが勇氣を失なふのが何よりも恐ろしい。グラウベルゲンの禦りは少くとも一八七一年のパリーの禦りと並び稱せられる様にしなければならぬ。

アンナ お休みなさいな。

フリッツツ 話しがし度いんだ、君と

アンナ 貴君はさつき奇蹟のはなしをしたでせう、あれはどんなこと？

フリッツツ 奇蹟？

アンナ 妾達を救ふ事の出来るかもしれないと云ふ奇蹟……………

フリッツツ あ……………奇蹟ぢあ無い、或る奇蹟の様な愚かな事なのだ。だがそれが我々を救つてく

れるかも知れない……………

アンナ　　どんなことなの？

フリッツ　　ベレンベルグその他の將軍達が俺達の滅亡を待ち切れず、どうせ滅亡するには決つて

居ると信じ込んでマフトシユタツトで反亂を起せばだ。

アンナ　　妾も同志からそんな望みがないでもないと言ふ事を一寸聞いたわ。

フリッツ　　うん……………一寸とした報告に接したんだが、可能性はある。フレイが將軍達の事を氣

にかけ初め、それに對し何等かの對策を取つて居るとさへ云はれて居る。猿だ。奴が今取り得る手段と云ふのは、××を早めるばかりだ、フレイは全勢力を將軍達に與へたのだ、このフレイといふ小魚は畢竟、將軍のスープの中に落入む運命にあるんだ。

アンナ　　でヨーロッパは？

フリッツ　　うん、若し我々が勝利を得なかつたなら、ヨーロッパはまだ二年位は眠つて居るだらう。極東も亦湧き立つて居る。だが、それ等は皆んな長い道程に據るのだ。極東も西歐も我々の頭の上に手を差し伸べて居る。

アンナ　　貴君は誰か慄へるものがあるとしても思つて？妾は自分の中に比べものにならない様な、

大きな死の覺悟が出来て居るのを感じます。妾にとつて死ぬ事は楽しい氣持さへします。

フリッツ　いや、悲しくても、苦しくてもよい。生きるのは良い事だ。お前は………まだ僕が帶をほどかない花嫁だ。各々の心の前で、犠牲は偉大でなければならぬ——併しこの犠牲を心から、嚴肅に持たさねばならない、それは僕でもない、お前でもない、我々なのだ。

俺は俺だが唯の一部分だ、

俺は俺と云ふ牢獄の中に居たくはない。

「俺」の中には情熱が集りつどふ。

併し「俺」は「我々」の中に流れこむのだ。

アンナ(彼に接吻し勿ら)　貴君の呼聲と歌は死ぬ事はありませんわ。だけど貴君は何もかも皆んな書きつけて居るの？

フリッツ　隙がないのだ、アンナ、そんな事は考へる隙もないのだ。

アンナ　愛の事を餘り考へないんですつて、妾達の愛の事を。

フリッツ　一寸しか考へないよ。何を考へる事があるんだい、だが愛は夏の太陽の様に何時もく僕
僕的生活の中を貫いて居る。アンナ、僕の力の半分はこの幸福から引き出して來るのだよ。僕

自身、僕だけの幸福から。僕はこの事をお前に隠しはしない。同志の者が「フリッツ・シユタルクは我々の中で偉い男だ」なんて云ふとおかしな気がする。これは何もフリッツ・シユタルクの手柄ぢあない。ノルドランド中で一番可愛い娘が僕を愛して居るからつて云つて、それが僕の手柄かい？さあ、僕に接吻しておくれ……（互に接吻する。）黄金の様な、しつかりした、うつとりする様な可愛らしいアンナ、考へて御覽、若し勝利を得る事が出来たらどんなに嬉しいだらうね。その爲めには悪魔の様な奴等と闘はずには居られるもんか！まだ僕が心から作つた歌が少しあるよ。そしてこの歌は益々伸び廣がつて行くのだ。

遠くは——暗い。

だが盲滅法泳いで行かう、

お前の手が俺の手の中にあるからだ。

生死を厭ふ事なく、おゝアンナよ！

お待ち！合圖が聞えたね？何か起つたんだ。

ゼツベル（飛込んで來乍ら）　アルトクロステル方面からの攻撃だ、たしかに。

フリッツ　馬の用意はいゝか？中央司令部から二三人、動員してくれ。我々は向ふに行かう。彼

處の防火壁と鐵條網の用意はいゝにはいゝが、萬全を期する必要がある。さうだ、何もかも變
るのだ、アンナ……………彼女の額に接吻する)どんな事になるかも知れない、御氣嫌よう、年老り
達の生活を見てくれ、食糧掛のものに話をして、馬鈴薯や鹽をけちくしない様に頼むんだ。僕
が戦争に行つたと云ふ事は年老り達、殊にお母さんには云はないでくれ、ユーリーが來たらこ
う云ふんだ、彼れは今日二十四時間休暇が出たつてね……………セツペルと出て行く)

アンナ(一寸忖然と立つて居る) あの人は疲れて居る……………あの人は生きて居なければならぬ……
……………あの人の爲めなら千度でも死んであげ度いけれど……………と云つて、それで救へる判けでも
なし……………

(ビーボル爺さん登場)

アンナ まあ、タワーリシチ。ビーボル！年老つても闘士の仲間入りが出来ない事は有りません
ね？お目出度う。

ビーボル こんな判けなんですよ、私の息子が居りましたでせう……………私のピョートルが……………
あれは私のたつた一人の子供でがした……………戦争が起る度に私はびく／＼して居たんです。と、
あの子はシユタルクについて行つて仕舞ひやした。負傷した……………かう云ふ報せを私は受取り

やした。そこで、お前さんが今此處に居なざる様に、私も出發して、此處にやつて來やした。えらい難儀でしたよ。やつて來た。ピョートルは何處だ？第二病院に居る。行きやした。ピョートル・ビーボルは二日前に死んだ。共同墓地に埋められてゐる。共同墓地の上に私は立つて居ました。それだけの話です。今は厨ひで働いて居ます。手助けをして居ますよ。死ぬのを待つて居るんですよ。生きて居るのは厭だし、もう生きては行かれませぬ。何もかもおしまひでさ。シユタルク爺さんが此處にやつて來たのを知つて、やつて來た判けなんですよ。

アンナ　え、タワリーシチ・マツクス・シユタルクは今すぐやつて來ますよ。

食糧掛　おい、タワリーシチ、持つて來ようか？

アンナ　持つて來て下さい、タワリーシチ！

(食糧掛去る。)

ビーボル(坐り乍ら)　さうだて……私は爺さんと倅の事を相談しやう。だが、お前さんとは若しかまはなかつたら、生きてゐる人の話をしやう。

アンナ　妾聽くわタワリーシチ。ビーボル。

ビーボル　お前さんは俺等の若者達が、中でもフリッツが可愛いいさうぢあないかい？

アンナ　おや、何を云ふの、タワリーシチ・ビーボル？

ビーボル　あゝ、タワリーシチ・アンナ、お前さんがあの人達にあんな仕事は止めて仕舞ふように忠告してやつたらね……まださうした時でないのに死ぬなんて！

アンナ　若しあの人達が死ぬとしたら、タワリーシチ・ビーボル、それは未だ時が来ないからに外ならないのです。

ビーボル　あれ達を説き伏せておくれ、アンナ。あれ達の多くは間違つた恥かしさからやつて居るのを俺は知つてゐる。お互に他人の前を氣兼ねしたり、自分等の新しい、若い指導者の手前を考へて居るんだよ。

アンナ　まさか？

ビーボル　全くの話。俵の名ごりに、俺はあの人達を救つてやり度い。俺達が良い具合になれる様な事を告げてやらにあならねえ——そして事は目の前にぶらさがつてゐるんだ。ゲフタの兵隊は——俺達の仲間だ、でみんなは自分自身にも、俺達にも濟まなく思つて、講和を望んで居る。處でフレイはどうだ？奴は社會民主主義者だ。奴はその、穩健な傾向を持つて居るが。だ
ビツセルやフリッツ・シユルタルクや、又はマツクス爺さんがフレイと肩をならべて位につく

様な内閣をつくる様に云つたらどうだ？さうすればノルドランドの上に太陽が登るだらう。

(間) 外の人達もさう思つて居るんだ。何故ならそれが一番利功なやり方だからだ。それこそ

——生きがひがあるといふもんだ。外の事は——強情と死だよ。(間) お前さんは利功でこんな

に奇麗なんだ、アンナ。お前さんはタワーリシチ・フリッツに大きな感化を興へるに違ひない。

お前さんの、その感化を初めるんだ。でなければ、お前さんも亦本當にフリッツや若者達全部

を間接に殺す事になるのだ……信じておくれ、俺は自分の身の事なんか考へては居ねえ。私

は死に度い……だけど皆んなは、皆んなは、俺のピョートルと同じ様に、生きる爲めに(泣く。)

皆んなが盲にでもなつて仕舞つたんだらうか？平和はもう直ぐなんだ……力を貸して下せ

え、アンナ！

アンナ いゝえ、タワーリシチ・ビーボル！

ビーボル いゝえ？……お前さんはあの人達を静かに墓穴から離さうとしたくはないのか

ね？

アンナ えゝ。

ビーボル お前さんは強慢と云ふ悪魔の虜にでもなつて居るのかい！

アンナ　　タワリーリシチ・ピーボル……他の人がこんな事を云ふのだつたら、怒つて仕舞ふんだけど、貴君は親切から云つてくれるんだからね。唯、妾を信じて下さい。問題はこうなつたんです、勝利か、死か！タワリーリシチ・ピーボル、死ぬことは——未來の勝利の力となるんです。併し説き伏せる事は——自分個人を救助することに依て勝利を殺してしまふものです。

(マックスとエマ登場。)

マックス　フリッツは何處だい？

アンナ　　急がしいんです。直ぐやつて來ますよ！ピーボル！お坐んなさい。テーブルに、皆さんほら、食糧掛りがスープを持つて來ましたわ。

(食糧掛、机の上に大きなスープの皿を置く。)

食糧掛　　馬鈴薯と水と鹽だ。外には何も無い、それさへ充分ぢあない。

マックス　　俺達は宴會をしに來たんぢあないよ(机に向ふ。)景氣はどうだい？

(更に話し乍ら、皆食事をする。)

ピーボル　　よくないんだ。俵を失くしちまつたよ。

マックス　　何處で？

ビーボル　此處で。グラウベルゲン防備の時に受けた傷で死にやした。

マックス　爺さん、お前さんは息子を失くしたのぢあないよ、本當の息子を獲たんだ。俺にもフリツツとユーリスの二人がある。若いあれ達が、お前さんの息子の様に斃れたとしたら、俺は自慢するだらう。俺達は皆んな、生活所の騒ぎぢあない。本當の生活は俺等の苦しみの値打ちにゆるんだ。寢床の上で苦しみ、死んで行くものは憐れむべきことだ。來るべきものの爲めに奮闘し戦死を遂げたものは——喜ばれなければならぬ！現在勝利を得る前に幸福で居られる奴はやくざ者だけだ。

ビーボル　俺はお前さんの話上手をすつと前から知つて居るよ、シユタルク。俺は何も俺と一緒に
にお前さんも悲しんでもらひたいとは思はないよ。唯お前さんの悲しみがその綺麗な言葉で俺の悲しみよりも、もつと軽くなつて呉れよばいよんだ。

(ユーリス登場。)

ユーリス　お母さん、お父さん！

(抱擁、接吻)

マックス　大きくなつたな、偉いぞ。

ユーリス　アンナ………接吻しやう？

アンナ　え………（彼に接吻する。）それはさうとして、貴君に二十四時間休暇が出たつてフリッツが云つてたわ。

ユーリス　休暇だつて？僕は今直ぐアルトクロステルに行き度いんだ。彼處ぢあフリッツが一人で指揮をして居るんだ。だから、危険なんだ。

エンマ　何だつて、フリッツが今戦つて居るんだつて？

マックス　何時でもだよ、婆さん。ユーリス、兄さんの處へ行つておいで。一分間も無駄をしな
いで行つておいで！

ユーリス　勿論です。僕はこの様な危い場合、何回も兄さんの爲めになつた事が有るんだ。僕は連絡の任務を負つてゐるんだ。併し、主な仕事は——××の中に我々の宣傳文を傳播する事です。

（母親を接吻して、急いで出て行く。）

（エンマ急に泣き出す。）

マックス　御覽よ、ビーボル？俺の年老つた婆さん、人の好い女工、そして俺の生涯の友達だ。こ

れはお前さんの様に泣き悲しんで居る。俺は偽善者ぢあない。俺は、自分の親しいものゝ爲に受けた痛手で泣くものを責めはしない。だが俺自身はもつと高い立場に立ち度い、いや立つだらう。俺達は歴史を創るんだ。俺達は一生涯、その日の爲めに準備して來た。俺達はマルクスとエンゲルスの年老つた教へ子だ。

(窓の外に音楽起る。皆、窓際に飛んで行く。音楽。)

聲々 (舞臺裏から)ウラ!

アンナ フリッツツが歸つて來たわ、ユーリスも一緒に。まあ嬉しい!

(フリッツツ、ユーリス、其の他數多の武装したコムミニストが入つて來る。)

フリッツツ ハハハハハ!今度はやつつけてやつた。ユーリスは愉快な合戦に間に合はなかつた。

握手しませう、お父さん!エンゲルス聯隊は今度は立派に戦ひましたよ。

マツクス エンゲルス聯隊と云ふのがあるのか?

フリッツツ 有ります。そいつは一番駄目な連中だつたんです。偶然にも其處には力の弱い同志が

集つて居たんです。或る時などは鐵橋から退却して、危く敵の手に渡して仕舞ふ處でした。初め僕は聯隊の編成をし直さうかと思つたのですが、その後ふと冒險を思ひついて、彼等を集め

て話しました。「今から諸君の第四赤色歩兵聯隊をエンゲルス聯隊と命名する。諸君の中にこの名を恥しめるが如きものは恐らくあるまい？」實際、彼等は非常に緊張しました。

マックス　ブラボー、ブラボー、フリッツ！

フリッツ　諸君は今日の一般の攻撃は非常に力弱いものだつた事に氣附いた筈だ！併しこれは第百四十一聯隊が我々と反對に、全然だらしがなかつたからだ。

第一のコムニニスト　彼等が弱くなつた事は事實だ。

フリッツ　併し我々もだ。ヤコブの話しに據れば、昨日、フレイとの講和に關する或る秘密集會さへあつたさうだ。そして其處には數百人の人が集つた。此れが悪いんだ。勿論、我々には現在集會を開いて居る隙などはない。併し僕は今直ぐに各方面の代表者を此處に招集するのは絶對に必要な事だと思ふ。それも委員達ではなく、各方面から一二名宛のものを特に選出するんだ。せめて彼等とでも協議しやう。

マックス　で、俺も一言しやべらして貰ほう。

フリッツ　屹度やつて下さい、お父さん。

ユーリス　實際、僕達は何時も希望を以て同志の世話をして居た。だが今度は信仰を失くして仕

舞つたんです。

マックス 信仰を失くした？何と云ふ事だ？

フリッツ 興奮しないで下さい、お父さん。彼等は正當です。そして僕も梶を曲げました。僕は最

近では、希望を語つた事は有りません。我々を待つて居るのは死だと云ふ事を眞直に語つて居
ます。その方がずっと良いんです。

マックス 併し死自身が喜ばしい偉業の如く感ぜられなければならない。

ユーリス 僕は本當の事を云ひますが——我々の大部分は現在その通りの事を待つて居ます。

エンマ フリッツ、お前は本當に疲れた様子をして居るね！

フリッツ 僕はもう疲れては居ません。戦闘が僕を振ひ立たせてくれたのです。

アンナ 此處では皆んなが疲れた様子をして居るわ。

第一のコムニニスト 休息する隙がないんだ。

第二のコムニニスト もう直ぐ何もかも靜かになるだらう。

ユーリス 苦しい、騒音に満された、偉大な日と夜とが過ぎて行くんだ。

第一のコムニニスト 本當に死ぬ事が平氣になり、労働者の良心を棄てない人々は——増々成長

して行くだらう。僕は確信する、今の時代に生きてゐる人々は堅固な結束を固め、光輝あるグラウベルゲンの圍みを想出すだらう。

第三のコムニニスト　僕は自分を、我々を見るのに歴史に對するのと同様になつて仕舞つた。或は亦、舞臺に立つて居るかの様に感じる。其處では本當に殺人が行はれる。併し立派にされなければならぬ。時代が見て居るのだ。

フリッツ　皆んなの考へがこうならばなあ。

(この話の最中に部屋は人々で一杯になる。彼等は入つて來ると禮をして、ベンチに坐るものもあれば、圓く群をなして居るものもある。ひそくと話しが聞える。暗い、嚴肅な雰圍氣。)

ユーリス　殆ど全部集つた。フリッツ、皆んなに話をして下さい。

フリッツ　同志諸君、我々は我々仲間の腰の弱いもの達が密かに集會を開いて或る問題に關して討議したと云ふ事を耳にしたんだ。

(間。)

聲々(厭々乍ら)　俺達も聞いた。

フリッツ　フランク。フレイは×××××政府の宣言を承認するだらうか？或は實際に我々は敵

の一味徒黨と鋒を交へずして、談判に依て屈服せしめる事が出来るだらうか？諸君は敵の陣營の張本人である×××が——急にお人好しにも自己の死期の近づいて居るのを認め、我々即ち後繼者に全世界を譲り渡すだらう等と考へて居るのではないのか？否、我々と彼等との間の闘争は決して和解し得るものではない！壓迫されるといふ事は——單に極度の汚辱を蒙るのみならず、まだ尻込みして居る總ての者共、引いては來るべき子供達全部をば裏切らす様になるかも知れないのだ。「金の指環」で話し合つた者達は裏切りの價を以て生命を救ふ事をば結構な條件だと思つて居るのでは無いのだらうか？併し、若し自分の妻や子の胸を防禦する事が出来ない臆病者を嫌惡するとすれば、世界的な光輝ある、全生活に思想を與へる吾々の理想を裏切る様な臆病者は何千倍嫌惡すればよいのか？この結構な條件は諸君にどんな生活を與へるといふのか？——自分の下劣さを認める様な暗黒な生活だ！その方が死ぬよりましだと思ふものが果して居るのか？若しそんな奴が居るとすれば、獸物にも劣る奴だ。そんな奴は俺にとつては人間ぢあ無い、そして諸君にとつてもさうである事を望む！自分は諸君の儼惡な顔付きを見て居ると、我々が過ぎて來た總ての事を想浮べる、そして自分に問ひ質すのだ、この様な爪の垢程の傷ついた、物倦い生活を得んが爲めに我々が大切にし、譽りにして居た總てのもの、幾多の價值あ

る人々の死に依て購つた總てのものを賣渡す様な人間が諸君の中に一人でも居るのだらうか？

(皆は黙つて興奮し乍ら聽いて居る。その時、誰かが堪らなくなつて急に叫ぶ。「そんな奴は一人も居やしねい。」と直ぐに至る處から叫聲が起る。「一人も居ない、一人も居ない、一人も居ない」。「皆んな戦死しやう」、「裏切者をやつつける」。)

フリッツ　裏切者は居ない！同志諸君、僕は諸君を欺瞞しはしない。皆んなは我々の滅亡を語つて居る。併し我々の滅亡について語り得る總ての事を、俺はあのインターナショナルの言葉の中に入れる様に努力した。死のインターナショナルと云ふ名前だ。タワーリシチ、唱はうちあな
いか、そして今日我が軍の至る處でこの歌が繰り返される様にしやう。さあ！

コーラス

進め、聖き戦ひの子よ、

地獄の暗黒よ、我等の上の蒼空よ。

不變の魂もて進め！

死に面した英雄よ、

子供の爲めの望みは輝く、

汝はその胸もて彼等のために道を開け

我等の爲めの墓石は輝く、

英雄よ、希みを忘れよ！

死の、最後の戦ひが

我等を待つ。

おゝ兄弟よ、英雄として

生活より出て行け！

若し夜が我等の上に

苦難の波もて閉し

父と子の中に

一つの輝かしき春をも與へざる時は、

労働者の譽れの嬰兒をして

新たなる殺戮の日迄、花咲かしめよ。

我等が血もて染めにし旗は

清からん、聖からん、永久に

死の、最後の戦が……

若いコムミニスト(飛込んで來乍ら)タワリーリシチ・シユタルク・タワリーリシチ・シユタルク！無線電信だ無線電信だ！、重要問題だ。

(彼に紙片を渡す。皆、興奮して動揺する。)

フリッツツ 聞け、諸君。『余の命令に依り、八月十二日夜、マフトシユタツトは戦時状態に墮れり。前大統領フレイ及び大臣連は逮捕せられたり。』

聲々 フレイの奴、ざまあ見やがれ！

フリッツツ 「余——ベルンベルグ將軍は臨時政府の首腦たるべし。」

聲々 ベレンベルグをやつつけろ！

フリッツツ 「今やノルドランドの名譽と秩序とを建つ可き秋である。善良なる全市民は高潔なる愛國主義者の政府に好意を寄せるであらう。」

聲々 何が高潔なる愛國主義者だ！

フリッツツ 「騎兵隊將軍エヴェルガルト・フォン・ベレンベルグ。」

(一時に多數の叫び。或は憤激し、或は高聲に語つて居る。)

ベレンベルグをやつつけろ！

此の時を俺は待つて居たんだ。

俺が云つた通りだ、反動の嵐が来るぞ。

聲々 一寸の間だ。

フレイの野郎よい氣味だ。

狼が狐を喰つて居やがる。

何が氣高い愛國主義者だ！

(間。)

フリッツ 未だある。此處に、マフトシユタツトのアメリカ新聞記者代表からの無線電信がある。「大統領フランク・フレイは國外に亡命せり。彼は反動に抗して闘へといふ聲明書をマフトシユタツトにまきたり。將軍の政府は——動搖し居れり。電氣、瓦斯、水道、電車は停止。勞働者は町外れに××××××を築きつゝあり」。

聲々 あゝ！

フリッツ 「××は分散し、××の××は極度に混亂し居れり。穩健なる社會主義者と支配階級代

表者間の紛争は極左の勝利を可能ならしむるやも知れず。

聲々(大きく) ウラ！ ウラ！

フリッツ 向ふの連中はこの事を知つて居るだらうか？ゲフトの軍隊の多くのものは今こそ彼等が何處につれて行かれるのかが判るだらう。

ユーリス 同志諸君、今直ぐにこの報導と俺達のアヂビラとをプリントしなければならぬ。僕が自分でそいつを飛行機の上から撒いて来る。

(走り去る。)

フリッツ 部署に付け！今の事を報告するのだ！仕事にかゝれ！

マツクス これは満更ら望みをかけて居なかつた事でも無い。

フリッツ 爺さん、俺達は勝つたのかも知れない。

ゼツペル 待ち給へ、諸君。皆んな、出て行く前に今こそ勝利のインターナショナルを歌ふ時だ

合唱

進めよ、労働者！

赤き空焼を見る若者は

勝利の日に語らん、

我、汝を創る。

新たなる大地の上に

既に太陽の紫なす楯は登り

嵐しする亂闘の叫びの後に

我が喜びの聲は上る。

今こそ勝利ぞ。

古き世は燃え果てよ！

炎の中こそ、

大地の花咲く天國は生れん。

(歡喜の叫びを擧げて出て行く。マックス、エンマ、アンナ及びフリッツが残つて居る。)

フリッツ

ねえ、爺さん！ねえ、アンナ！「奇蹟が起つたんだ」。奴等は馬鹿になつたんだ。若し

やと思つて居た總ての事が疑ひも無く我々の前にやつて來たんだ。ベレンベルグが××につな
いで居る望みは何の役にも立ちはしない。彼は多くの××を持つてゐるだらうか？それより先

に分裂が初まるだらう。素晴らしいチャンスが来たのだ。

(ゼツペル登場。)

ゼツペル　フリッツ・シユタルク、どうやらゲフトの××ではこの様子を知つたらしい。××の様子が見える。カツツエン・ガウゼン方面からは、電話で報告があつた通り使者がやつて来て居る。

フリッツ　その使者と會ぼう、無論。

ビツペル　君に云つて置かなければならないのだが、ユーリスが夢我夢中になつて居るんだ。空いてる飛行機が無かつた爲めに馬に乗つて一目散に飛んで行つた。まるで氣でも違つた様だ。この様子を××××に知らせ様として居るんだ。向ふには連絡があつて、動揺してる人間は判つて居る。

フリッツ　何て云ふ小僧だ。亂暴にも生命が危いかも知れないのに。

マツクス　俺はあの血氣盛んな處が好きだよ。

(飛行士登場。)

飛行士　タワーリシチ・シユタルク・僕は一寸前に着陸したばかりで、今事件を耳にした處だ。

併しさして驚きもしなかつたよ。××の××は明かに紛争を起して居る、やつと今、彼處此處で射撃を始めたばかりだ。僕は非常な低空飛行をやつたんだが、目を呉れるものは一人もなかつた。

フリツツ　それは大いに結構だ。

ゼツペル　將軍の進撃を蹴散らさうぢあないか？

フリツツ　とんでも無い！そんな事をすれば、將軍の掌中に墮るのみだ。自分から手を出してはならない……我々は口の中でもぐぐ云ふ事は止さう、ただ立場を明かにするんだ。

(第一のコムミニスト登場)

第一のコムミニスト　タワーリシチ、シユタルク。衛戍司令官カツツエンガウゼンの報知に依ると、××の東方部隊の工兵隊及び砲兵隊から使者が到着したさうだ。彼等は××及び××の××に對する一致共力の會議を要求してゐる。

フリツツ　フレイの名に依てか？

第一のコムミニスト　いゝや、そんな事は全然無い、彼等は××××の××××の××××を承認してゐる。

我々は知らなかつたが、向ふではベレンベルグの増長して行く横暴とフレイの道化芝居とはず

つと前に明かになつて居たんだ。彼等は何處に連れて行かれるのか、誰の爲めに火の中から栗をとり出すかを判つきりと見たのだ。

(窓の直ぐ下でインターナショナルが聞える。)

フリッツ　此方に入つて呉ればいゝに。濟まないが中央委員會を招集して呉れ。

第一のコムミニスト　一寸待つて呉れ給へ。

マックス　思ひも掛け無い事だ……俺等は勝利を得られるんだ……今直ぐに。俺の息が通つて居る中に。

アンナ　ゼツペルの言葉が實現したんだわ。祈り度い様な、死んで行く様な氣持は必要は無かつたんだ。死なうと思つて居たのがかうなつたんだ！

フリッツ　結婚しやう、アンナ。さうだらう？もう今なら、自分自身の仕事の爲めに一寸の時間を裂く事が出来る。

アンナ　貴君は何か氣掛りな事でもある様ね、お母さん？

エンマ(微笑み乍ら)　何でも無いよ、何でも無いよ、妾しや、唯ユーリスの事が少し氣になるんだけど。

第二のコムミニスト　　タワーリシチ・シユタルク。奇蹟的な報知だ。西部戦線は講和した。ゲフ

トは數個大隊を率ゐてペレンベルグの下に退却して居る。××の殆ど大部分は××に對抗しつゝある。我々に共鳴し、増大しつゝある者達の間集會や會議が行はれてゐる。ひどい變り方だ。
フリツツ　　使者達に會はう、その後で自分でゲフトの軍隊に行つて來る。

第二のコムミニスト　　それが善い、もうさうする時だ。

第三のコムミニスト(馳け込んで來乍ら)　　タワーリシチ・シユタルク、氣の毒な事を報告しなければならぬだ。タワーリシチ・ユーリス・シユタルクが事件を報告して會議を開くために××の陣地に行く途中、敵の伏兵に殺られてしまつた。

(一寸の間沈黙、窓の外遠くに歌聲。進めよ労働者！)

マツクス(妻を抱く)　　婆さんや……………婆さんや……………この時を穢してはいけない……………苦しいに

は……………苦しい、だがユーリスは立派な、若々しい死方をしたんだ。勝利を喜ぶんだ。婆さんや、勝つたんだ。勝つたんだ。(微笑む)泣いてるのかい？(自分も泣く)俺達は年寄りで、あれをととても可愛いがつて居たんだから……………(泣く。)

第三のコムミニスト　　使者が到着した。

アンナ (フリッツに)

可愛相な、可愛相なユーリス！あの人達に何か云つてお上げなさいよ。

フリッツ！

フリッツ お父さん自身で何もかも話しをするだらう。

マックス 一寸の間泣くだけの事だ。俺達も——人間だ、何も恥しがる事は無い、だが不平は云ひはしない、俺等は判つて居るんだ。判るか、判るか、婆さん？勝つたんだ。家のユーリスの様な若者は澤山居る、そして彼等總ては大きな、感謝すべき、友情に依て直ぐに幸福になるだらう。——そしてあの子はその爲めに盡したんだよ。なあ婆さん？

エンマ うん、貴君、さうだよ(彼を慄へる手でかき抱いて接吻し、途方に暮れる。)

第一のコムニニスト 使者が来た、使者が。

フリッツ お父さん、向ふの部屋に行つて落ちついて下さい、貴君を慰め度くは有りません。貴君自身何もかも判つて居る筈です。

マックス いや、俺は行くまい、俺は使者達がどんな話をするか聞き度いのだ。お前は俺が意氣地無しだと思つて居るのか？さうだ、こうした場合俺が意氣地無しだつたら、俺のユーリスが許して呉れるものか！

フリッツ 使者を通し給へ。

（使者が去る）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

（幕）

第十場

南國の温泉地。棕櫚のある園。上手にカフェエの小卓。下手、大きなプラタンの樹の下にベンチがぼつんとある。舞臺奥には街に續いて居る階段。遠くは海と空。園には人影は少い。太つた男が卓に向つて居る。彼の處に給仕がやつて來る。

太つた男　今日はどうしてこんなに人が少いんだね？

給仕　私共の處もさびれ出しまして御座います、ムツシユー。亡國民の方々が鱈腹飲んだり――食つたりされまして。その上私共の此の街も穩かでは御座いません。此處にも労働者が居りますからな。

太つた男　此處も穩かではないと云ふのかね？

給仕　全くて御座います。三週間前迄は全く愉快で御座いましたよ、まだ一度もなかつた程、愉快で御座いましたよ。ペストの最中に宴會です、ムツシユー！併し、盛りはすぎて舞ひました、ムツシユー。彼方を御覽なさいまし。モーニングを着た若い方が見えませう？　あの方を御存じですか？

太つた男　まさかあの方がノルドランドの大公ぢああるまいな？

給仕 ところがさうなんで御座いますよ、ムツシユー。彼の方も道樂をし盡したけれど、今ぢあ

どうです、淋しさうぢありませんか。彼の方は餘り無駄使ひが過ぎたんですよ。御免下さ
い、ムツシユー、あの方がおこしですから、私は彼處へ參ります。御注文は何に致しませう？

太つた男 ベルモットとゼルツエル水。

給仕 かしこまりました(退く。)

(エレガントな服装をし外套を片手に投げかけた大公登場。カフエーの小卓に坐り、あくびをしてか
ら、葉巻を喫かす。)

給仕 ××？

大公 ××なんか居ないよ。

給仕 新聞で御座いますか？

大公 新聞なんか要らん。

(給仕去る。フランク・フレイが外套を着、ステツキを輕快に振り廻し乍ら傍を通る。)

大公 大統領ぢあないか？

フランク・フレイ ××ですか？

大公 コニヤツクを御馳走しやうか？